



ふ
た
り
、
花
園
で

あ
な
た
と

のぞえり総集編

Saq Takano Presents
Lovely! Fan Book Nozomi & Eli

R-18

嵩
乃
朔



あなたとふたり、花園で

のぞえり総集編

*Sai Takano Presents
Loveliest Fan Book Nozomi & Shi*

R-18

嵩乃
朔

あなたと
ふたり、花園で





Contents

† Prologue †	05
描き下ろし	
優しい、罰	09
2013.8.13 コミックマーケット85	
夏の終わりの、熱い熱い日に	41
2013.10.14 僕らのラブライブ!2	
春も夏も秋も冬も	77
2013.12.31 コミックマーケット86	
Welcome Home	137
2014.6.14 あなたとラブライブ4	
† Epilogue †	154
描き下ろし	

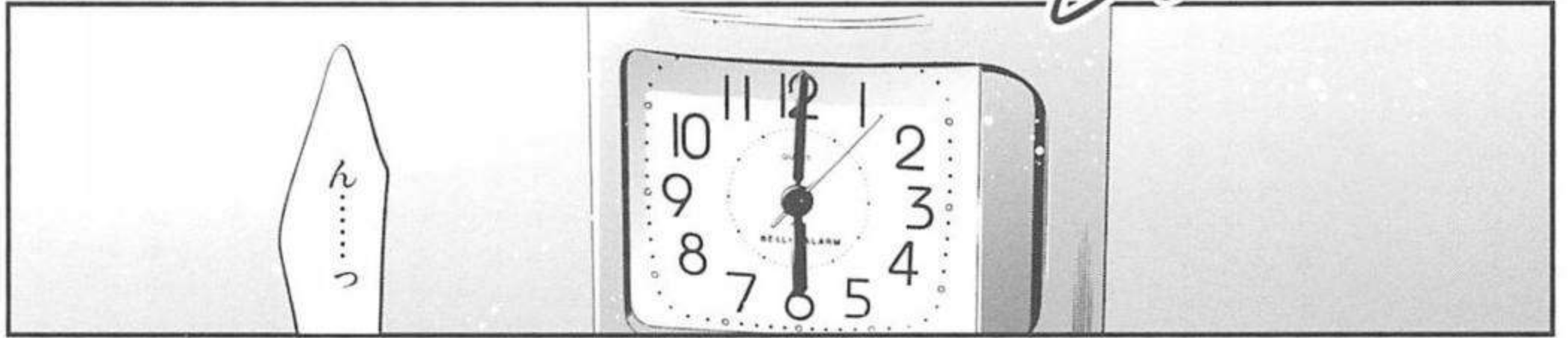


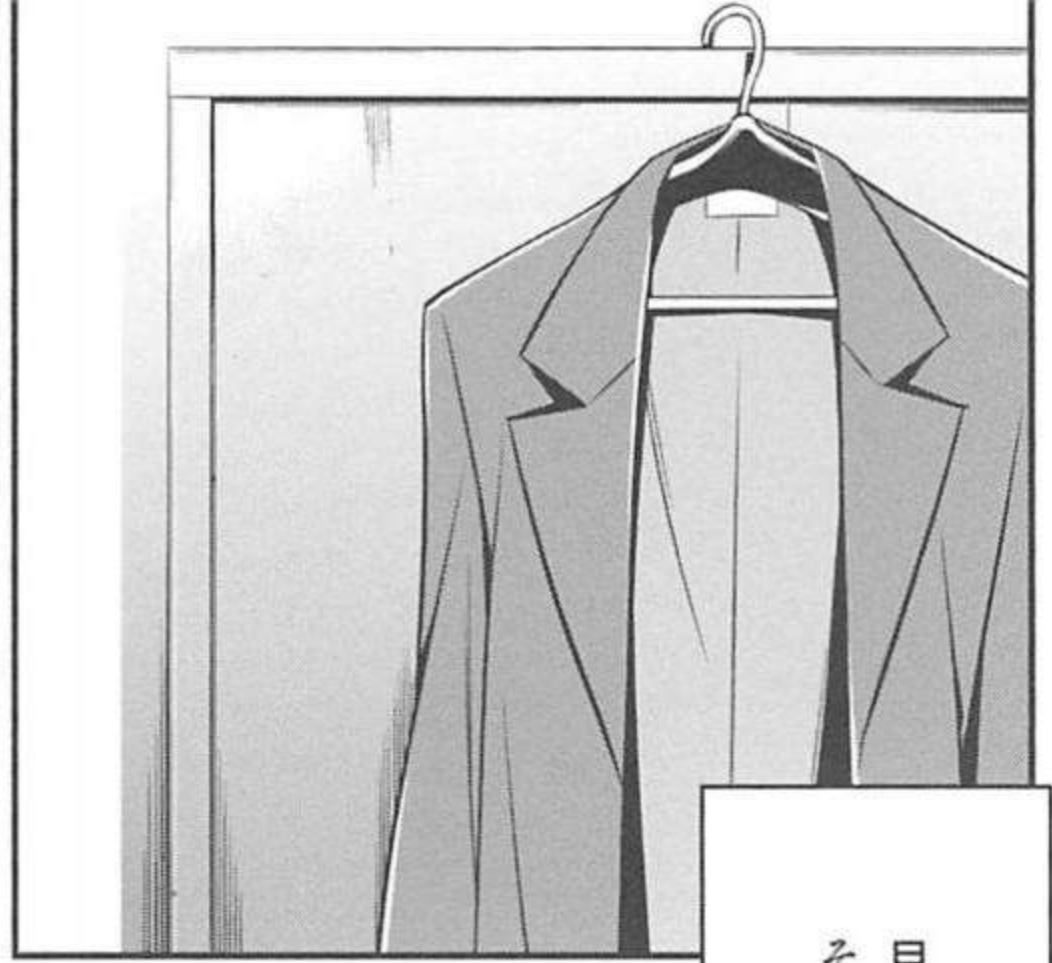
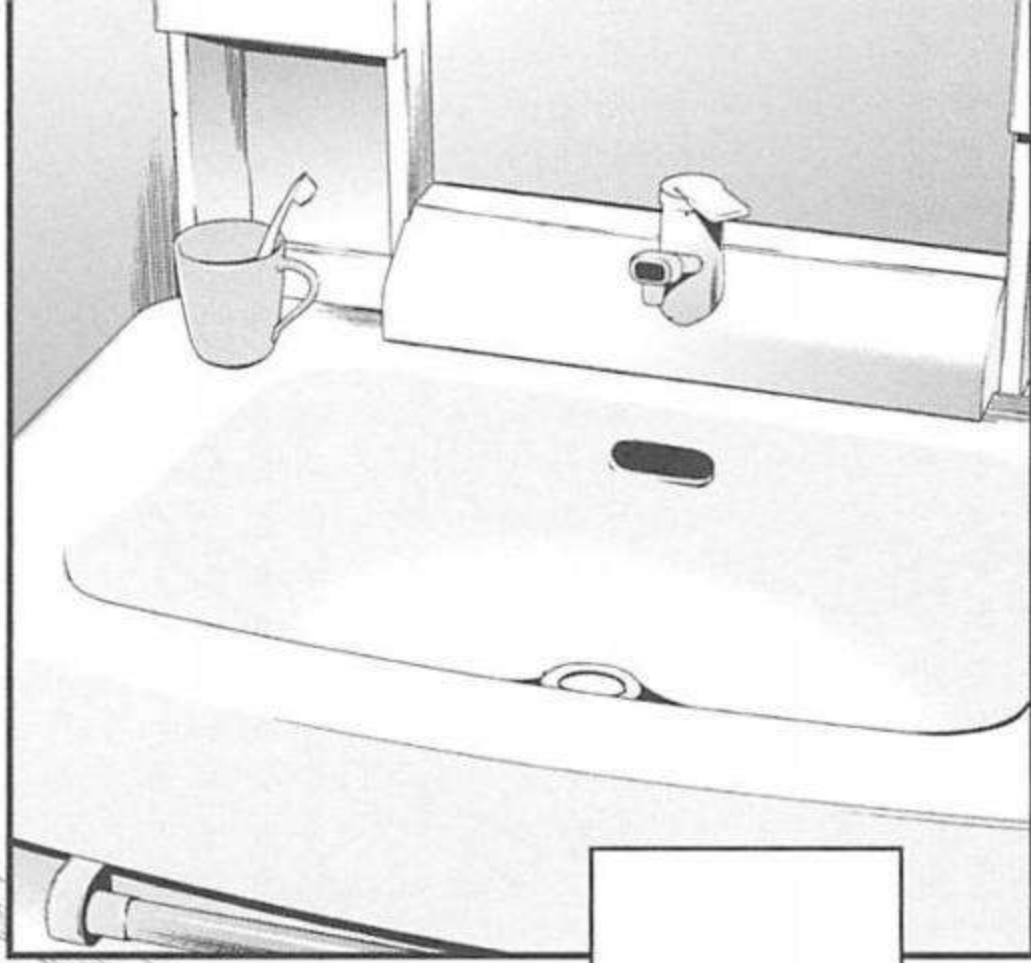
Prologue



Saq Takano Presents
Lovelive! Fan Book Nozomi & Eli

ト
ト
ト
ト
ト
ト
ト
ト
ト
ト





目を覚ましても
そこにいるのは

じぶんひとりで

マンションは

わたしだけの
お城

ひとりきりの
お城





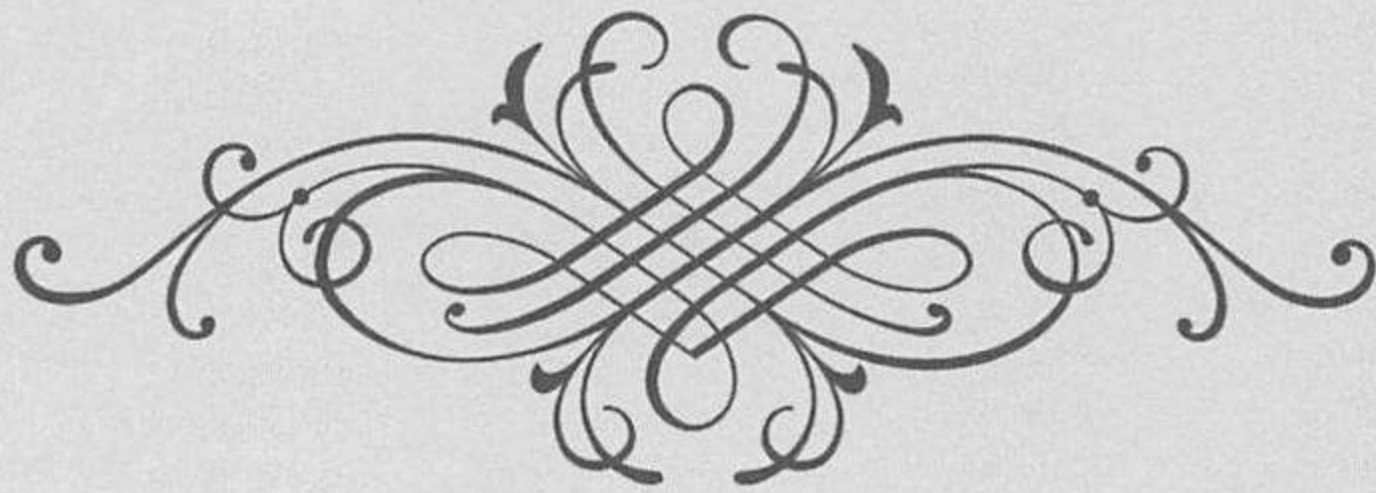
あなたとふたり、花園で

のぞえり総集編

Saq Takano Presents
Lovelive! Fan Book Nozomi & Eli

R-18

嵩乃
朔



R-18

優しい罰






優しい、

Yasoshi Baku
Presented by Sui Tokano


罰

それはあまいあまいばつ





希の手 冷たい
……緊張してるの？



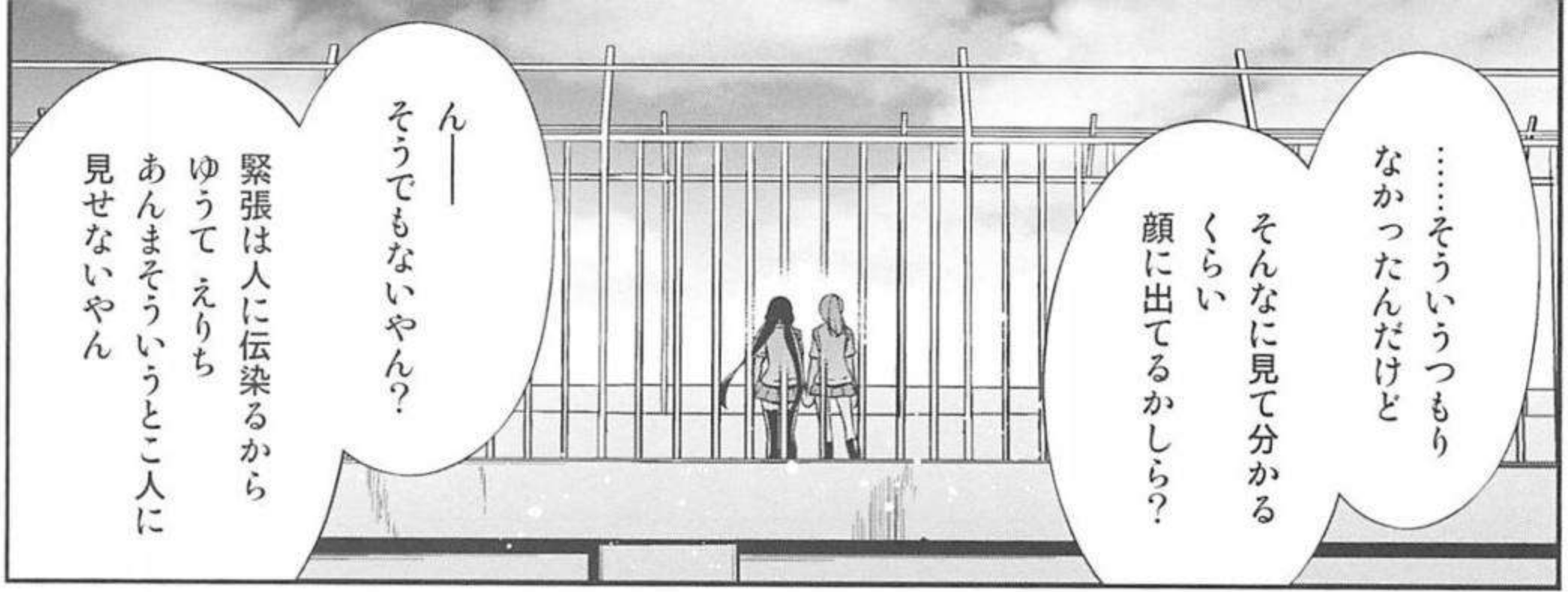
そらするやろ

……えりちの手は
いつも冷たいから
あんま分からへんね

してるわよ 緊張

ふふ分かつとる
顔見たら分かるやん





……そういうつもり
なかったんだけど

そんなに見て分かる
くらい
顔に出てるかしら？

んー
それでもないやん？

緊張は人に伝染るから
ゆうて えりち
あんまそういうところ人に
見せないやん



……なら
いいけど

……どうして希は
分かったの？

こらこら
うちが何年
親友しとると
思うとるん？

3年

そりゃあさよ



一緒におるだけで

……ねえ
だって
絵里ち

風を
感じる
みたいに

分かるよ





小さな手の震えも

あなたの胸の高鳴りも

あなたの胸の高鳴りも

ライブ
成功させましょうね

不安を強がり
で隠そうとしてしまつところも

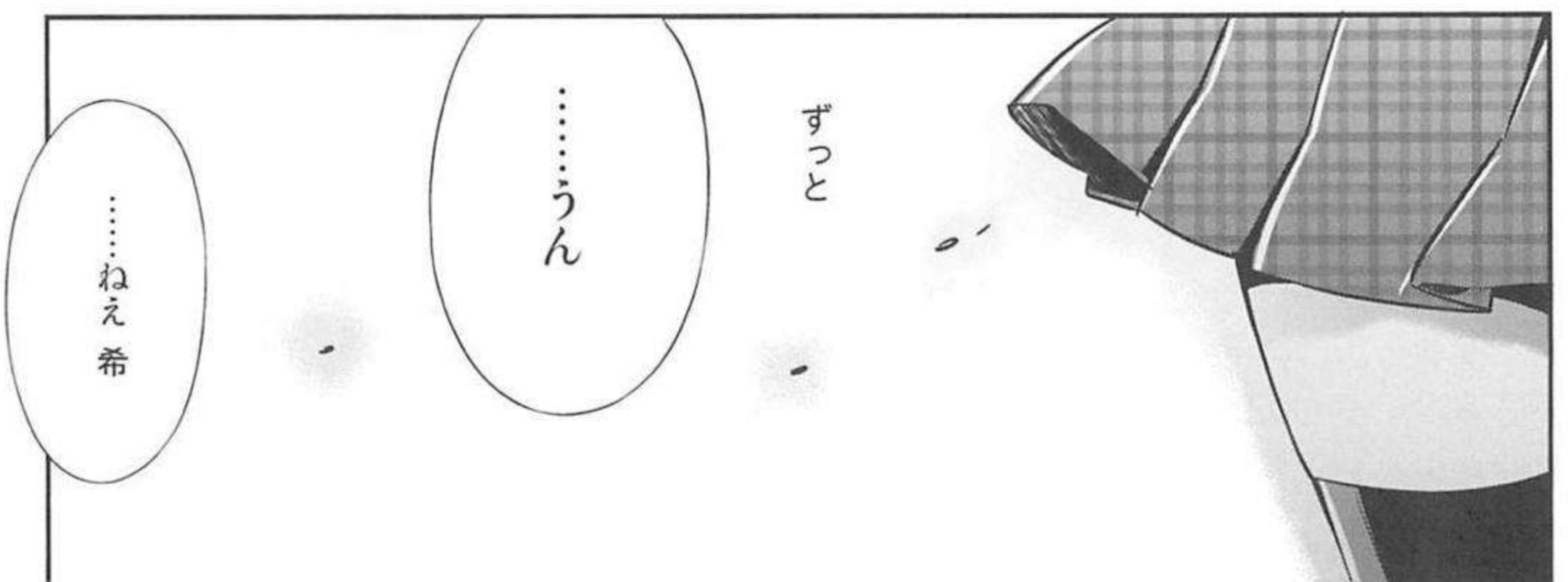
トクニ

トクニ

トクニ

—だって

ずっと隣にいたから



……ねえ希

……うん

ずっと

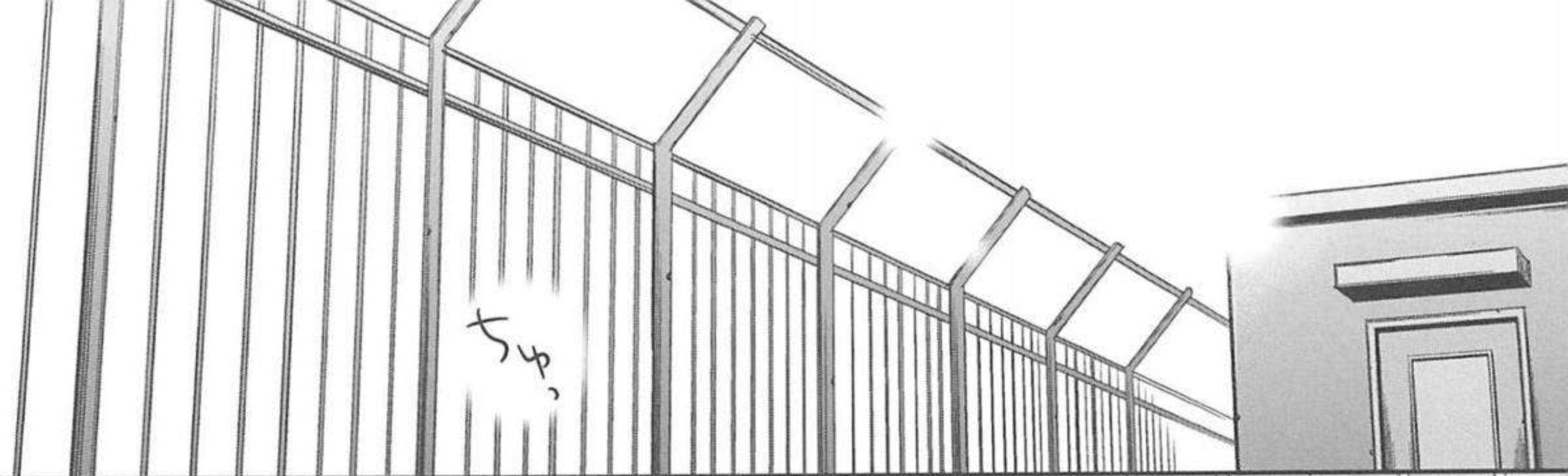
ん？

どないし——

ええり——

==>

——



ちゅ



……せ 成功するように
おまじない

はっ



……っ





かああああああ



……自分からしといて
照れてるん？

だだっ！



スピリチュアルガールの
うちにおまじないなんて
それはむしろ催促ですかあ？

いびいびいびいびいびいびいびいびいびい

もっもっ……

そっ
そんなんじゃ……

わっ
私は希の緊張を――





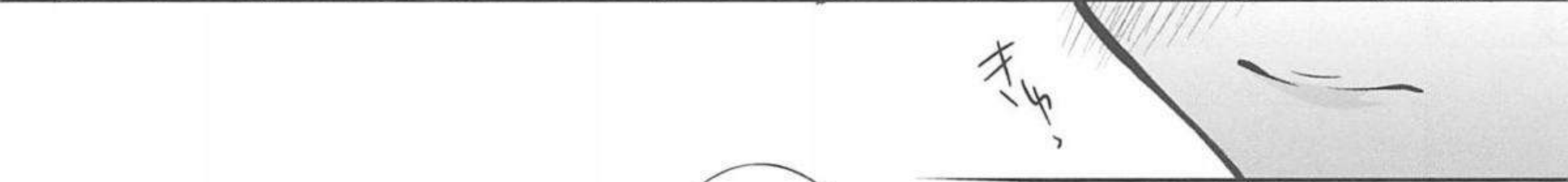
の…のぞ…



んっ



……



余計動悸が
するんだけど

……
ぼが




それは

甘い
あまい
胸の痛みを

うちをドキドキさせた
罰……やね

あなたと



かしこい
可愛い

Kashikoi Eiccha
Presented by Sui Takano

エリーチカ

ねえ どうか おねがい



東條さんの
恋占いはよく当たる

そう言われて
早数年

だけど
好きな人なんておらんくて
自分を占った事はなくて

高校に入学して
生まれてはじめて
好きになった人は



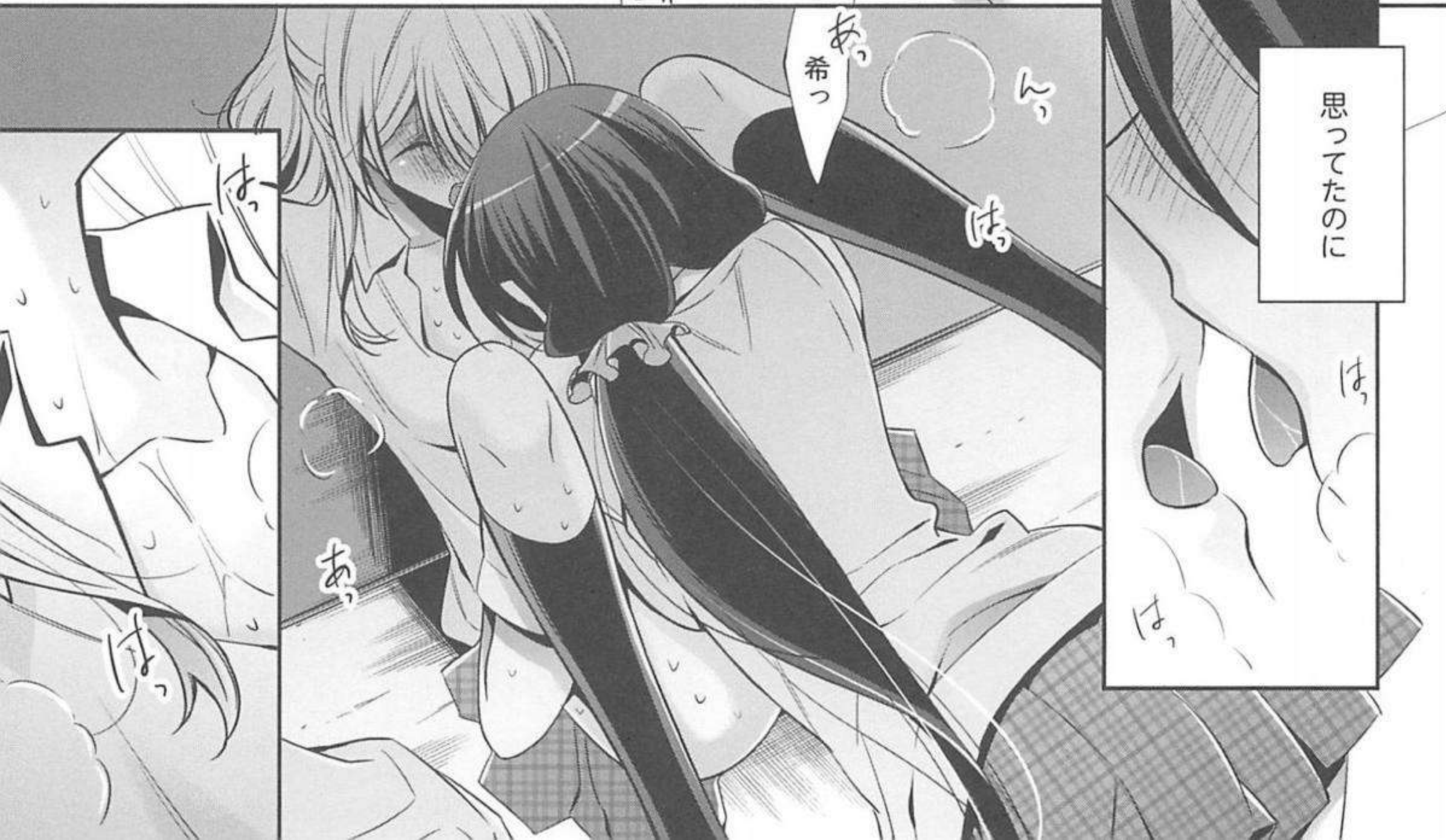
金色の髪が
真っ白な肌に映える

それはそれは
まるでお人形のような
人だった

だけど

言えるわけなくて—
2年もずっと
隣におったままで
それでいいと—

思ってたのに





震えて…
可愛ええ…

えりち…
汗かいたる



えりちの味…



絵里ち

ああ、希い…

かたまり

おはあ

希っ……！

ねえ どうか

ずっと

おばあさまの母校である
この音ノ木坂学院を
守らなきゃって
思ってた

でも必死で
頑張っているつもりでも
空回りしているのは
自分でも分かってて

でも

それでも自分では
どうしようもなくて



気がついたら
誰の前でも
頑なになっていた

私は



ひとりでも
頑張らないとって

賢い
可愛い
エリーチカ

はあ そんな にじぶんを せめないで

ちよ……ちよつと

はあ

はあ



や……っ

は、

は、

はあ、

やだ……

こんな時に
そ……な……呼び方……!

はあ

はあ



んっ!

……恥ずかしい?

は

は

は

はあ



ちゅっ、

ぼっ
ぼかあ

かろ





だって…希が……

ん？

は…恥ずかしくなるような事
ばかり……っ



えりち
今日も学校で
ことりちゃんの
こと……

μ'sのみんなのこと
……考えとったやろ



あっ

やっ

あっ

やあっああああああっ

希っ……



やあっあっ

あっ



こい……もう
すこなつとるよ

やっやだ

ほら

やッあッあッあッあッあッ



ここんとこ
生徒会の仕事も
色々あったし

……さびしかったん？

やだ……

希……

……あッ

ん……否定せん
ゆうことはそうなん？

あッ

あッ

やっ……あッ



やっ……あッあッ

希の指……

すこい……奥……

感じ……



……のぞ……みッ

ん……ばかあ……

ん……？

……っ!!!

も……

やだ……

キス……して



さっばさっば...

.....ええよ

んんッ...んんッ



希.....!

希.....!

は、は、は、

は、は、は、



希.....!

トロ



は、は、は、

あああああッ

は、は、は、

希.....!

のぞ.....ッ

ああッああああッ

ああああああッ

は、は、は、



希ツツ…のぞ…ツツツツ

だめ…っ

もう…

ツツツツ
ツツツツ
ツツツツ



もう……
希のばか

なんや
最近ばかばか
言われとるなあ
うち

だって……!

——でもな

μ'sのことは
大丈夫や——
……大丈夫

……希?

それにな
嬉しいんよ



えりちほつとくと
頑張りすぎちやうやん

でもなうちとおる時ぐらい
ただの可愛いエリーチカで
いて欲しいから……

な?



……

……んもう
ほんとに……
あなたって人は
なんでも
お見通しなんだから

……なあ絵里ち

μ'sを知って
絵里^{あな}ちは変わったけれど
それは私^{うち}も同じで

それに……希が
言うとおどろきに大丈夫な
気がしてくるから
不思議だわ

——あの日

あなたの背中を押したとき
あなたの涙をはじめて見たとき

——初めて

ああ、このままじゃあかんのやなって
思っ

そら良かったわ
せやから——

変わるべきなのは
絵里ちだけやなくて

ん？

告白も出来ないまま
2年もずっと一緒におっただけの
自分で

うちとおる時だけは
可愛いエリーチカでおってな？



……うん

——あの日
あなたの背中を押ししたとき
あなたの涙をはじめて見たとき

私も^{うら}変われる勇気を
持てたから——



ミュージック・

Music Start
Presented by Sai Takano

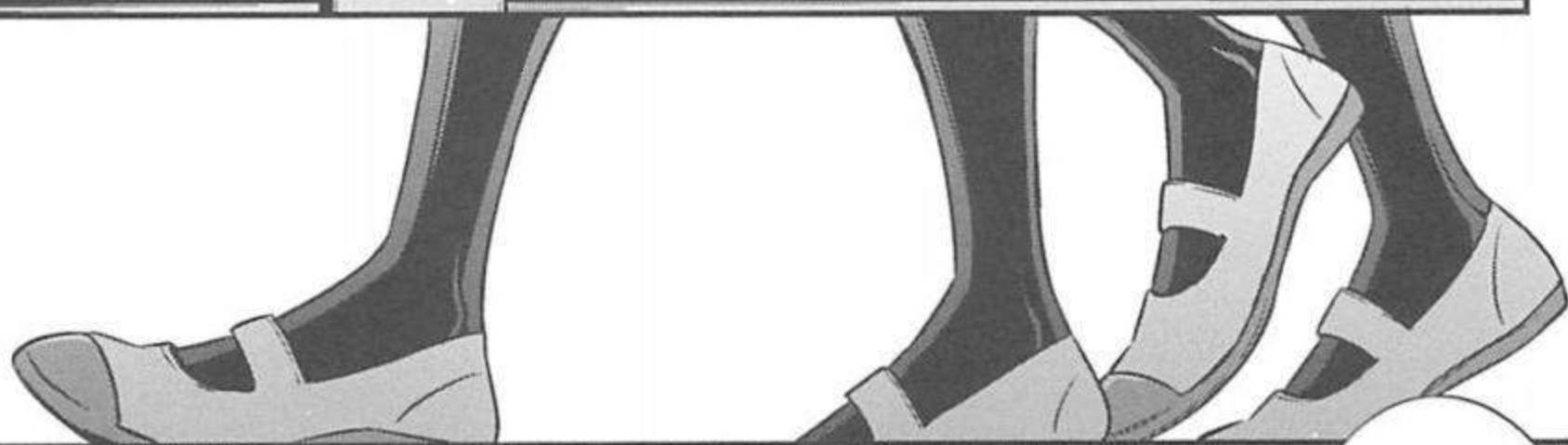
スタート!

あなたとみんなと



そろそろ 時間ね

ことりちゃん
間に合うやろか？



まるで戻って来るのが
分かってる口振りね

占いでそう出た？

絵里ちかて
分かってるって
顔してるやん





あの穂乃果のことだもの

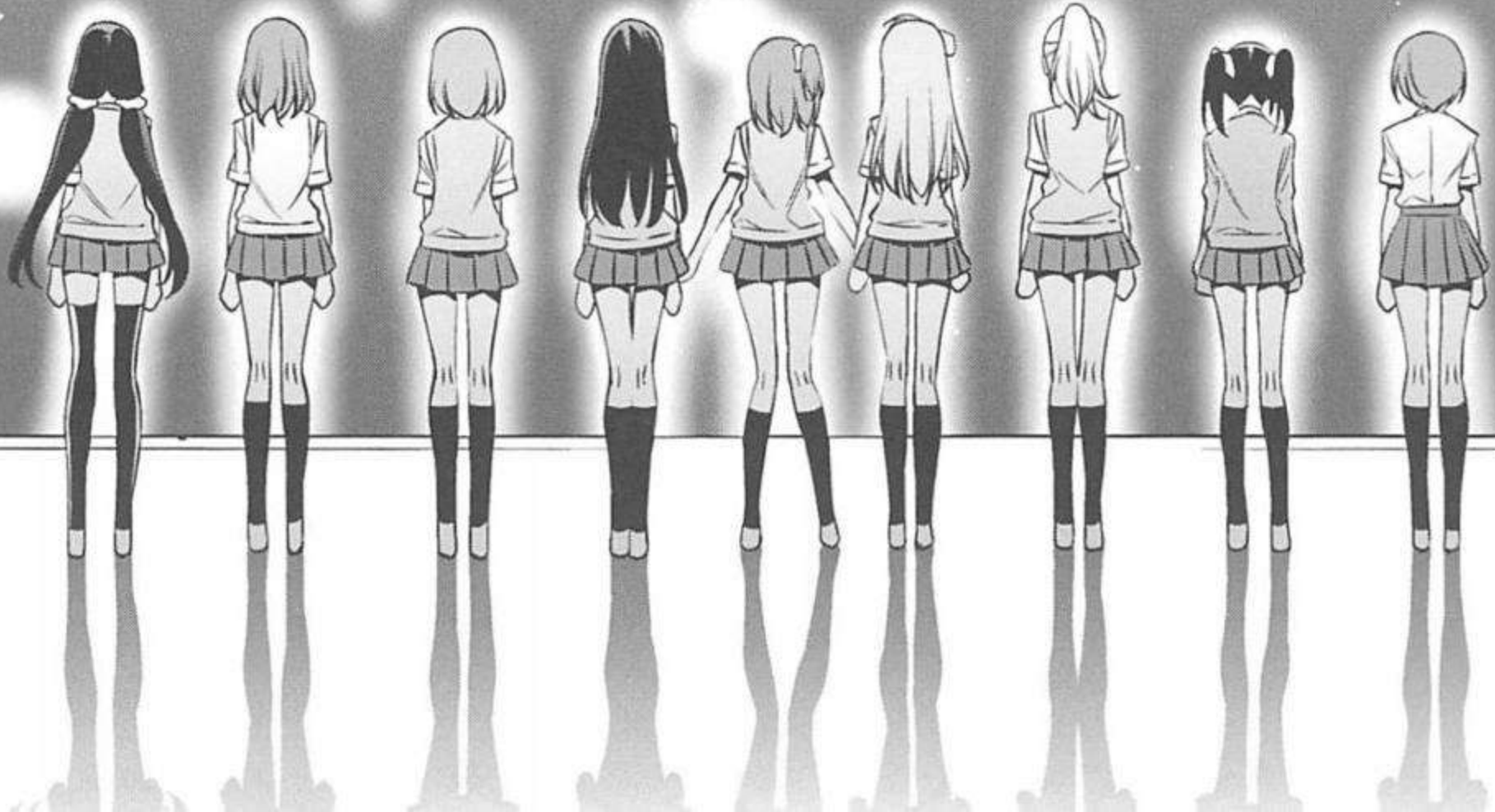


せやな

さ
行きましょう

そして
最高のライブに
しましょうね

9
人で!



ここまでお読み下さりありがとうございました。嵩乃朔（タカノサク）と申します。…気がついたらライブライブにどっぷりはまって課金地獄です。いや天国。

くっすんまじ天使。純愛レンズは名曲です。純愛レンズ歌い踊るくっすんは天使です。多分背中に羽根とか生えてる。うちにまかせとき！

3rd ライブはライブビューイングで見ましたが、ライブライブを知って、ライブライブを好きになって、本当に良かったと思いましたっつっつっつ！！！！！！

…なんかうまく言葉に出来ませんが、大好きなものを「大好きだー！」と力いっぱい思える嬉しさ、そんな感じです。4th ライブも楽しみです。チケット取れるか怖いですが、取れなくても心から応援したいと思います。

くっすんまじ天使。

LOVEIVE!

くっすんまじ天使。

えっと、本文についてですがのぞえりです。無論えりのぞ大歓迎。生徒会コンビ最強。密室生徒会室も天国。


でものぞえりって、ほんとえりのぞも美味しいですね。次回の本は多分えりのぞです。のんちゃんがえりち好き過ぎてドキドキ過ぎて可愛くなってしまえばいい！ のんちゃん可愛いですまじ天使。エリチカも可愛いよ。μ'sはみんな可愛いけど！

あ、本文中、色々試行錯誤しすぎて本来夏服のところ長袖シャツにしちゃってたり統一されていないですが、すみません；

とにかく、のぞえりは夫婦—————
—————！ の合い言葉で締めたいと思います。いえ—————！

嵩乃朔

あとがき



優しい、

Yasashii Batsu
Presented by Saq Takano

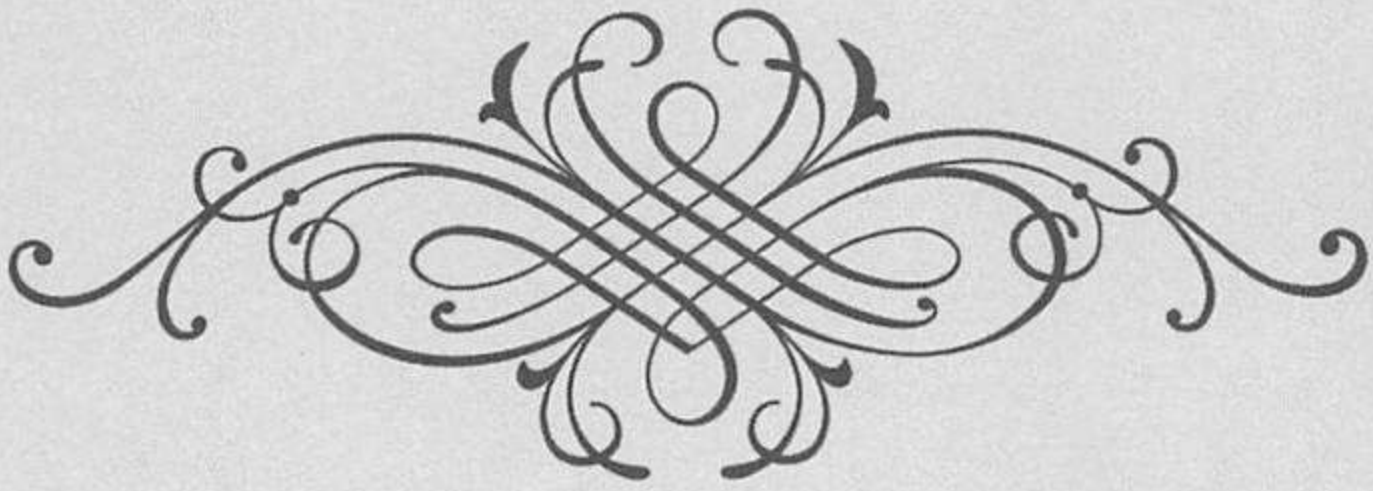
罰

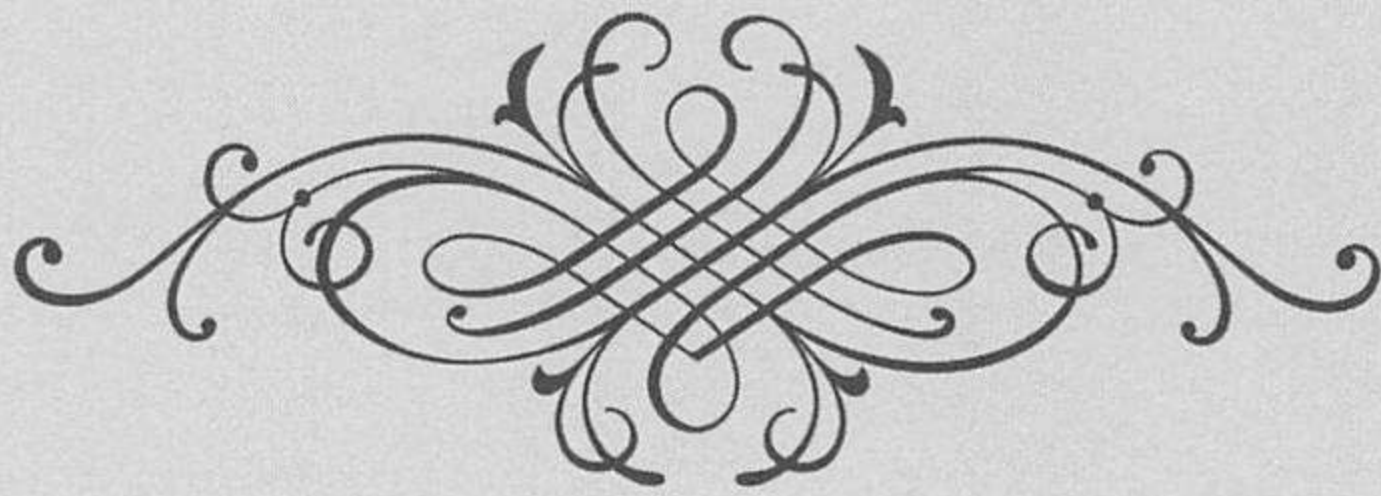
じゅんじょうはせいぎ

2013年8月11日初版発行

発行 嵩乃朔 / Waterfall
s.takano.wf@gmail.com
<http://unmoral.sakura.ne.jp/waterfall.html>
<http://www.pixiv.net/member.php?id=2675148>







夏の終わりの、熱い熱い日に

You gave your heart to me, so I'm gonna give you mine.
I had no idea about this side of my personality either until I met you that it.

LOVELIVE! ELI & NOZOMI



信じて…こころがときめいた瞬間を

彼女は生徒会長で。

自分は、彼女を支える生徒会副会長で。

しつかり者の優等生に見えてその実、割と脇が甘い。甘いというか、サバサバしているように見えて押しが弱く頼まれると断れない性格のため、仕事というか雑用を受けすぎて自身の容量を超えてしまう。

——で、人がいいかというのであればかりでもなくて、案外かっこつけたがりで、ええかっこしい、で。

大変な素振りを見せたがらなくて。涼しい顔なんてしてるから。そういうところがあるから、そつと後ろから支えて。

ねえ、だから。

うちにだけは、お願い、『本当』を見せて。だから。

「ごめんね、希」

——なあ、謝らんで？

#01

どうしてこう、次から次へと仕事が増えるのか。

夏休みも終盤、恐らくにこや凜、穂乃果などは課題に追われ始める頃だというのが容易に想像出来ていたのだが、一朝一夕でどうにかなる量ではないし、まさかなという思いからも多少なりともこなしているものと思っていたが、——現実とは実に恐ろしいもので。

優等生の絵里には理解しがたい事実が突きつけられた。

事の発覚は、昨日の夜。

ここから電話がかかって来て、「あのお……えつとお」と例のやたらと甘ったるい猫なで声を出したかと思うと、いきなり素の声に戻って「課題写させて下さいお願いします」とスマホの前で

土下座しかねない勢いで懇願されたのをきっかけに、もしやと思
い方々へ確認を取ったところ、穂乃果と凜の両名もまったく一切
手をつけていないとの報告を受け、絵里は開いた口をふさぐ事が
出来なかった。——その夜彼女は一体何度ハラショーとつぶやい
た事か。

よって、μ'sの存続の危機再来という不名誉すぎる現状を打破せん
がため、午前中は課題をこなす事にあて、μ'sの練習は午後のみ、
と非情な決定を下すに至った。

ではそれなりに課題をすませていた海未、ことり、花陽、真姫、
希、絵里の面々であるが、練習にいそしめるかというのと、やはり
そうではない。穂乃果、凜、にこは放っておくとほとんど課題に
手もつけないのだから、誰が監視するか、課題の疑問点に誰が答
えるかというのと、やはりそれはμ'sのメンバーとなるのは必定で。

結局、絵里の心の安まる時はないのだった。課題など個人の問
題であるのだから、突き放したとて絵里の責任ではないはずだが、
気がつくとあれこれ指示を出してしまっていた。

……まあ、今回は部長自身がそれこそ問題を積み上げてくれた
わけで。となれば、結局は自分が舵を切る事になるのも致し方な
い。

絵里はなかなか減らない書類の束を見て、小さく溜息をついた。
——生徒会長だってやりたかったわけではないのに。

数ヶ月前の生徒会選挙前の数週間を思い起こせば、教師に懇願
され結局引き受けてしまった自分がいて、つくづく自分という人

間が面倒になる。

今だって、書類の束を目の前に、生徒会室にひとりこもったり
して。

にこの課題は希が見ている。

希とふたりで生徒会の仕事をこなせばそれなりにはかどるとは
思うが、にこを放置も出来ない。まさか下級生のメンバーに面倒
を見させるわけにもいかないので、やむ方なし——だ。本来なら
ば、今頃は朝から夕方までめいっばい身体を動かして練習にい
そんでいたはずなのに。そう思うと、いけないと思いつつも溜
息が落ちてしまう。

つい、いるはずのない希の席を見てしまう。

……ストレスかしら。

普段それほど彼女の存在を意識しているわけでもないのに、一
度意識してしまうと、気になって仕方がなかった。生徒会の仕事
は大事だと思ふしやるべき事だと承知しているが、気分が乗らな
い時だってあるのだ。絵里はスマホを取り出し、画面を操作した。
少し休憩。

画面が明るくなって、昨夜の希とのやり取りを遡って見返す。

「ふふ……」

誰もいないのをいい事に、声に出して笑う。

希と新たな関係——友達よりももっと、近い関係——になって、
ひと月。それまではメールなどでちょこちょこ連絡を取り合う程
度だったのに、今は少しでも時間が出来るとスマホを開く始末で。

している会話はなんでもない事ばかりだ。でもうっかりすると、本当になんでもない内容にハートをくつつけて送りあっていたりして、それだけで——嬉しくて。ひと月前では考えられなかった事ばかりで。

「希……」

スマホの画面に映る希の名に触れ、呼ぶ。

ひと月前と何も変わらない筈なのに、その名を呼ぶ事に優越感を感じるようになって。

だって、

希は私のものなのよ。

——そう思っているはずで。

それが、画面に映るメッセージからも伝わる。恥ずかしいからか希はあまり口では言ってくれないが、文字だとよく気持ちを伝えてくれて。

「だ」

「い」

「す」

「き」

——その文字に触れて、目を閉じる。私もよ、希。

「……だいすき」

そつと、囁く。

でも言ってしまったって、少し恥ずかしくなる。独り言だということもあるが、歌の歌詞でなら散々歌ってきたというのに、それを好

きな人に思いを込めて言うのは想像以上にとてもドキドキするもので、絵里は頬が熱くなるのを止められなかった。

けれど今度こそスマホを手放す。

さ、もう仕事に戻らないと。

誰が見てるわけでもないのに、赤い顔を誤魔化すように書類に向き直る。——その時だった。遠慮がちなノックが響いて——、

「えりち、おる？」

希が顔を出したのは。

言いながら、引いた戸の隙間から小首を傾げるように希がこちらをのぞき込んでいた。ふたつに結った長い黒髪が揺れる。

自然と口角が上がるのが自分でも分かった。

——ああ、なんて現金。

さつきまで沈んだ気持ちでいたのが嘘みたい。

「希！」

「どう、えりち？ 仕事進んだ？」

その甘い声を聞くだけで胸が弾む。

「まあ、ぼちぼちって所かしら。そっちは？」

「ん〜まあ、なんとか？」

なんとかかと言いつつ彼女の表情を見てみると、なんとかはなっていないだろうと想像出来てしまって、絵里は形の良い眉をかすかにしかめた。ただ悲観するほどではないのだと分かる。

「お昼兼ねて休み時間にしちゃって、一時から練習にしようってことりちゃんか」

「ああ、もうそんな時間？」

時計を見上げると十二時ちよつと前だった。……きりの悪い時間だが、恐らく三人の集中力が切れたのだろう。まあ頑張っているのだろうし、潮時だろう。

——なお、本来指示を出すはずの海未は弓道部へ顔を出している。

「分かったわ、じゃあ、私たちも部室に——」

鞆の中のお弁当箱の入った巾着を取り出そうとして、小さな音に手を止めた。希が後ろ手に生徒会室のドアを閉じていた。

そして希がこちらへと歩いて来る。

とくり、と心臓が鳴るのが分かった。

少し、待って。

彼女が、机を回り込んで脇に立つ。

希の手が、机の上に置かれた絵里の手に重なった。

ひっくり返すようにして、その手を握り返す。

見つめ合って。

指を、絡め合って。

すき。

……うん。

そんな確認を、指先で、して。

それからゆつくりと、

口づけた。

何度、ここで、生徒会室で彼女と口づけを交わしただろう。学校で唯一、ふたりきりになれる場所。廊下に響く足音を気にしながら、何度。

ふたりきりになれる場所は、多くはなくて。触れ合いたいのにならなくて。だからこうしてふたりきりになれると、決まってキスを交わした。時間を惜しむみたいだ。だって、一日は二十四時間もあるのに彼女とふたりつきりになれるのは僅かな時間しかなくて。

好きよ。

うん。

唇から伝わる熱が、甘くて。

朝会って、部室で別れて、生徒会室で仕事をして、離れていた時間はたかだが数時間なのに。それだけでもっと好きになっているような気がして。

……だから。

「なんや……えりち、積極的？」

そんなつもりはなかったが、重ねる唇の性急さに希がくすりと笑った。絵里は拗ねた振りをして眉をしかめる。それを見た希がこつりと額を当てて来た。

「……寂しかったん？」

「……だって、希がいないんだもの」

以前は言えなかったような事が、あっさりと唇から紡がれる。

彼女は部室でみんなとわいわい課題をしているのに、自分はひとり生徒会室で雑務処理。でも、本音はそこじゃ、ない。

「にこにこ……したの？」

そう問うと、かすかに表情を変える希。何を、とは聞き返さない。

「……妬いちゃう？」

その問いはつまり、した、という事で。——いわゆる、わしわし、を。

少し、むっとした。

一瞬、苛立ちをこらえようとしたが、ああしたんだと思うとふつふつと沸いた苛立ちをこらえ切れずどうにでもなれ、と思つて。

「あまり調子に乗つてると、怒るわよ？」

「ふふ、こわあい」

言葉とは裏腹に、嬉しそうに希が笑う。……まったく。全然反省してないんだから。

多分彼女は、本当には知らない。私がどれほどやきもち焼きか、——嫉妬深いかを。

まあ、見せないようにそれなりに努力しているのだけど。だって、嫌じゃない。みつともなく取り乱すなんて。それを彼女に見せるなんて。

——でも、

絵里は余裕を見せる希に噛みつくようにキスをした。乱暴に、深く。引き寄せた舌に噛みつき、引っ張る。それにはさすがに驚くだろうと思つたのに。

「ん………っ」

舌を押し込められ、口の中を蹂躪され、強く抱きしめられた。

「のぞ、」

名前すら呼ばせて貰えず、何度も、何度も唇を奪われた。

唇を離すと熱い吐息がこぼれ、糸を引いた。途切れた糸のほつものを舐め取るように、希が唇を、舐めた。互いの吐息がどちらのしまうような熱が湧き上がる。

「えりち」

ああ。

名前を呼ばただけなのに。

——ずるい。

「うちが好きなのは、えりちだけやもん」

甘い声でそんな事、言わないで。

碧色の目を、そんなふう潤ませて。

——溺れて、しまうから。

希が、ちらりと時計を、見た。——どうして、とか、思わなくもなかったけれど、甘い声に自分を誤魔化す事しか出来なくて。

ベストの下に入り込んでくる手を、拒めなかった。

学校なのに、とか。

この後練習なのに、とか。

思う、のに。

だめ、なのに。

唇が触れそうな近い距離で吐息が混じり合う。

彼女の吐息もまた熱を帯びているのが、分かる。暑さのせいだけじゃ、ない。

僅かな期間ではあるが、肌を重ねる事で身体が覚えた熱、だ。

——希。

希。

希。

——私だけの、

私の、

希。

彼女に抱きしめられているだけで、理性が。

「希」

「あつ……！」

ベストの下に潜り込んでいた腕を掴み、壁際に彼女を押しつけた。

小さな声で、囁く。

「あなたがいけないのよ、」

そんな言い訳を口にして、何か言いかけた口にキスをして。ぬめる唇を味わって。

「えりち、うち、」

「だめ。今日は私がするの。スカート、脱いで」

——汚したくないから。

そう囁いて、碧色の瞳を見つめる。絵里は知っていた。希が、絵里に見つめられる事に、ひどく弱い事を。案の定、頬が赤く染まって視線が泳ぎ出す。

惚れた弱みやから、なんて以前冗談めかして言っていたが、それはこちらも同じ事なのに、片想いが長かったから、なんて言われると何も言えなくなる。

——どうせ私は鈍いわよ。

希にこんなふうに困った顔をされる度、自分へのふがいなさに苛立ちがつのる。こんなにも彼女を愛してるのだというのに、それを伝える術が分からなくて。鈍くて、不器用で。

でも。

求められるばかりじゃない。

求めたいの。

それを知って欲しくて。

「脱いで」

わざと、拒めないように強く、言う。どうせ。

彼女が拒めない事を分かっている癖に。

だって、惚れた弱みなんでしょう？

見つめると、彼女が言葉に詰まって、居たたまれないように目を逸らす。

赤い顔のまま、彼女がスカートのホックに手をかけた。

ほら、私の言う事には拒めない。

希は、私のもの。

私だけのもの。

ゆつくりとファスナーが下ろされる。うつむき加減の彼女の耳は真つ赤で。彼女は、求められる事に——甘える事にひどく不慣れで。

ファスナーの下りきったスカートに戸惑っているから、もう一度脱いでと声を掛けると、ようやく脚を抜き始める。脚から抜けたスカートを奪うようにして、それを書類の載せられたままの机に投げ、まじまじと彼女を見やる。皺の寄ったシャツの影に下着が見え隠れして、恥ずかしそうに脚を閉じようとするのを、言葉ひとつで制する。

「下着も、脱いで」

けれど躊躇われるのか、シャツの裾を握る。握ってから、ようやくゆるゆると手が動く。それはひどく緩慢としていて。

「あの……あんま、見んといて……」

かすれた、声。

「だめ」

ぴしやりと言って先を促す。

もう一度躊躇った後、彼女が下着を脱ぎ出す。学校の、生徒会室で。

副会長の、親友に、それを無理矢理脱がせて。

脱いだそれをくしゃくしゃに丸めて手の中に隠そうとするから、奪って、机に投げて。

「あつ、」

「希」

今の彼女は、下半身はトレードマークのニーソックスだけを残し何も纏っておらず、辛うじてシャツの裾が心許なく隠しているだけで。絵里は、

そつとシャツをめくり上げた。

露わになる、希の——。

彼女が震える。

ジジジ、と蝉がうるさい。

夏休み中とはいえ、部活などで学校を訪れている生徒は多い。

廊下を誰かが通り抜ける。

そこに、指を沿わせた。

#02

あかん。

そう、思った。

部室では仲間たちが、戻ってくるのを待っているはずだった。

けれど、触れられるだけで、熱が、こみ上げる。

ミンミンと蝉がうるさい。窓を閉めているのだというのに、けたたましいその声は生徒会室にもいやというほど届いていたが、まったくというほど耳に入っていなかった。

時折、エアコンがブブブ、と鳴く。音ノ木坂学院は歴史があると言えば聞こえはいいが、裏を返せば古いということ、生徒会室のエアコンもまたそれなりの年季を経ている。無論創立当時からあるわけではないが、古い。壊れるまでは使い込まれるのが常なので、古い分効きも悪いのが困りものだった。

熱い。

——熱かった。

素肌を汗が伝い落ちる。

だが、それは気温のせいでもエアコンの効きが悪いせいでもなかった。

「えり、ち」

ゆっくりと、こすり上げられる。汗で濡れたそこは熱気を帯びていたものの、まだ、で。乾いた指先の感触に、けれどじわりと熱が湧き上がる。

自分で、分かった。

夏休みの学校で、部活を抜け出して、仲間が待っているのに、生徒会室で、スカートも下着も脱がされて。

——興奮、していた。

「希、」

触れられて。

学校、やのに。

こんな。

背に当たる壁の冷ややかさもすぐに温くなってしまったが、それさえもなんだか背德的で。

だってここ、学校やし。

みんな、待ってる、し。

それに。

絵里がゆっくりとそこをこすりながら、希の目を見つめ、言った。

「ベスト、めくって、ボタン、開けて」

低い声で。

地声は高いのに、こんな時だけ低く甘い、彼女の吐息混じりの声。

「……………」

「して、」

彼女の目がいつになく、いやらしくて。

本当は少し戯れに触れて、笑い合って、それだけのつもりだった。やきもちを焼いた彼女をからかって、ごめんってして。でも。言われた通りにする。ベストをまくり上げ、胸の上まで引き上げると、ゆるゆるとボタンを外した。途中で手が止まりかけると、全部ね、とせかさされ、拒めなかった。

絵里がシャツを左右に開く。思わず希は自分の痴態から目を逸らした。それは、なんとも言えない光景で。ベストもシャツも脱ぎかけたまま、下半身を露出して。そこに絵里が触れていて。こんな彼女、初めて、で。

「……、ち」

顔どころか、全身が、熱い。名前すら、呼べなくて。

絵里が手を伸ばして、背のブラのホックを外した。ブラをめくり上げる。露わになる、胸。先端が上向いて、さらされる。

「……………」

恥ずか、し、くて。

いたたまれなくて。

早く、触れてほしくて。

けれど絵里はしげしげと胸を眺めた。見られて、熱が、上がる。

それから先端には触れずに、下から持ち上げるように触れられて。指の形にたわんで、やわらかくて大きなそれは、彼女の——絵里の、思うとおりに形を変えた。押しつぶされて、形を変えて。

絵里が、顔を近づけた。息が、当たる。

ああ、早く。えりち。

うちの。

舐めて。

ねえ。

だけど、直ぐにはそうしてくれないくて。

彼女がちらりとこちらを見る。思わず目を逸らす。——浅ましく待っているのを知られたくなくて。

その間にも身体がうずいた。

こんな格好させてるくせに。

ねえ。

えりち。

してよ。

彼女のベストの裾を掴み、引き寄せる。

——お願い。

すると彼女がくすりと笑った。

「浮気した、罰よ」

「……………やあ」

すると言い訳はさせないとばかりに先端をぺろりと舐められ

た。

びっくりと大きく震える希。

羞恥に染まる、頬。

——抗えない。

興奮と恥ずかしさでどうにかなってしまいそうだった。学校で、こんな格好をさせられ、彼女のなすがままになっている。けれど、拒めなくて。

だって、彼女がそう求める、から。彼女が求める、なら。

だけど。

——分かっている、これは、絵里には惚れた弱みと言ったが、本当はそれだけじゃないのも。

こんなあられもない姿をさらしながら、それでも拒めないのは、求められたら何もかも受け入れてしまう自分のせい、なのだ。自分の弱さを、それを絵里のためだと言いついて。昔からそうなのだ。散々転校転校を繰り返して、気がついたらひどく受け身な自分がいて。こんな自分、嫌なのに。にこにこなんでも受け入れて。そんな、性分で。

そう。

平気。

ひとりでも、平気。

そう自分を誤魔化して。

本当は、ひとりなんて、嫌なのに。

ねえ、一緒にいて。えりち。私だけを、見て。

本当は、私だけを見て欲しくて。

——えりち、うちだけを、見て。

本当はそう言いたいのに、——言えなくて。言えないから、従順な振りをして。

わざと、彼女の嫉妬を煽るようなことをして。

きつと、独占欲が強いのは自分の方だ。

彼女の吐息が、敏感になった尖りにまとわりつく。

ねつとりと、舌が胸の先に絡みついた。大きく舐められ、その

まま舌先で尖りを弾かれ、身体が震える。

えりちが、うちの。

えりちが。

ずっと、ずっと、片想いで。ずっとずっと、片想いが続くのだと思っていた、のに。

強く、吸われる。

じわりと、

濡れた。

彼女に舐められて、身体が、喘ぐ。一度知ってしまった熱に、

いとも簡単に。

身体が、欲する。

それが、分かる。

「え……ち」

ぷつくりとふくらみかけたつぼみを絵里がくわえた。くわえて、歯で甘噛みしながら、舌先で何度もねぶられる。その感触に、熱



が湧き上がる。何度も、何度も、強く舌でしごかれて。

「……………っ、」

堪えられずに、絵里の頭をかき抱いた。思わず指先に力が入ってしまい、彼女の頭を自分の胸に押しつけるような体になる。

彼女が先をくわえたまま、こちらを見た。

「なあに？ 物足りないの？」

彼女が。

——微笑ってる。

それが分かって、希はいいやをするように首を振った。

時折彼女は、大胆になる。堅くて真面目すぎるところもあったけれど、こちらが驚くような大胆さも持ち合わせていて。特に、舞台の上や、——ふたりきりの時は。

試すように絵里が舌先で尖りをぐりぐりと押す。それがただ煽るだけの行為だと分かっているのに、腰が震えた。

「……………っ、」

味をしめたのか、激しく吸われる。ちゅうちゅうと、音が立つほど。もう一方の乳房は湿り気を帯びた彼女の手に揉みしだかれ、彼女の気紛れで大きく形を変えた。

「……………違うの？ こっ、……………ほら」

不意に乳房から離れた手に、「ここ」なる場所を撫で上げられる。

「はっ、ああああっ」

始めて大きく声が出た。慌ててふさぐものの、一度覚えた感触に、唇がわななく。そこ、がひくつくのが分かった。

今度はゆっくりと前後に指を動かされる。ぞわぞわとした感触に、声なんて堪えきれなくて。

「あああああ、」

……………濡れてる、わよ。

低い声で囁かれて、震えが一層大きくなった。触って欲しい。触って触って触って——もっと、えりち、

「え……………ち、……………っ、」

「ここが、いいの？」

こくりと頷いた。——が。

ぴたりと指が止まる。

「……………っ、」

ずっと蒼い瞳が細く弧を描いた。

「……………自分で、して？」

「……………っかあ」

——ずるい。

「ばかじゃないわよ、……………ね？」

声はびっくりするくらい甘いくせに、意地悪、で。

希は、きゅつと下唇を噛んで、

「…………………………っ、」

ゆっくりと、

「—————」

腰を、動かし始めた。

絵里の指に、押しつけるように、して。

と腰を強く彼女に押しつけてしまっていて。

「希」

ほしいの。

えりちの、ほしいの。

こちらを伺うように熱っぽい潤んだ目で見つめる絵里の唇を求めて。分かって欲しくて。押しつけて。

くすりと彼女が笑う。

「なあに？ どうして欲しいの？」

——意地悪で。

「やつ、あつ、……りち、」

「言わないと、してあげない、わよ？」

「やあ……」

緩慢になでる指がもどかしくて。ずるいつて分かってるのに。涙ぐんだ瞳で蒼い瞳を見つめ返す。——欲しくて。

唇を噛んで、

言った。

「えい……ち、指、……入れ、……て」

くすりと微笑う、彼女。

「……よく出来ました」

そして。

深く口づけながら、どろどろになった彼女の指が、ゆつくりと侵入してくるのを、

——味わった。

「ふう………うんっ、」

声が、くぐもる。

キスさえおろそかになる。絵里の舌に舌を絡め取られながら、指の、感触に。

「ふあっ………あああっんあつ」

——学校、なのに。

細く長い指が押し込められ、中で大きく揺すられる。いつもの、こちらの反応を伺いながらの繊細な指の動きではなく激しく内側を揺さぶられて、がくがくと腰が震える。まだ、入れたばかりなのに。

ぐちゅり、と大きな音がした。

絵里の指が中で大きく曲げられ、いびつな形のまま大きく出し入れされる。

「ひあっつ、あつ、だめっ、」

内壁を前方に抉られ、こすられる。

「ああ、だめっ、それ、あつ、あつ、あつ、」

何度も、何度も、何度も。

ぐちゅ、ぐちゅ、とひどい音がした。乱暴に掻き回されている

のが音でさえ分かる。それなのに感じてしまう。

「やあっつっ、だめっ、えいちそれっ」

ぐちゅ、ぐちゅ、ぐちゅ、

「あかん、それ、あつ、あつ、あつ、」

絵里の手が、掻き回す。乱暴に。

もうこのままイッてしまいたかった。

何も考えず。ただ絵里の手で。

このまま。

そう思い始めた時、腰を支えていた方の手が、離れて――

「希、」

下腹部に、触れて。

「やあああああ」

しげみとクレパスをやんわりとかき分けて。――中は激しくい

じられたまま。

ぬるぬると。

小さな、芽に、触れられて。

腰が、震えた。

ぬるぬる、ぬるぬる。

「んっっっっ、あああ………あ、」

がくがくと激しく腰が震える。絵里の手は、希を知り尽くして

いた。頭のいい彼女はセックスも上手かった。どこをどうすれば

希の身体が悦ぶかを理解していた。クレパスの中も、膣の中も激

しく愛撫される。

視界が汗と涙でぼやけ、何もかもが溶けて混じり合う。

「はあっ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、」

「んっ、はっ、あつ、………あつ、」

互いの吐息が熱く熱く混じり合う。

――身体の中心も。

そして。

「ああああああああああつ」

――えりち。

快感が突き抜けた。

とろとろとした液体が腿を伝う感触が分かる。このままではソックスも床も汚してしまうのが分かったが、身体の熱さに何も考えられなかった。ずるずると壁に背を預ける。

絵里の指が、そこから溢れ出た愛液を追いかけるように、這った。ぬるぬると塗りつけられて、その量が、分かる。

息が、苦しい。――熱い。

不意に腿のあたりをさ迷っていた手が、再びそこへと触れた。

「えり………」

触れて、指先に力が込められ、

「あ、あかんよ、えり、」

開かれた。

愛液で滑らないように中指の先がわずかに押し込められ、人差し指と薬指とで、開かれる。

「うち、まだイッ………」

冷めない熱が腰にだるく残っている。

それどころか、脈動する感覚が未だ消えてはいない。

希。

呼ばれて、思わず視線を上げる。

潤んだ、瞳。

「希、」

自分を欲する、声。

名を、呼ばれ。

囁かれる。

——脚、あげて。

「え……？」

「あげるの」

「やつ、あつ、だめつ、うち、また、イツ、」

「あげて」

熱い甘い声で囁かれ、従わざるを得ない。希はひくひくと小さな震えを繰り返しながら、ゆっくりと右足を上げた。

大きく開かれる脚。

希自身の愛液によっててらてらと光るそこが、絵里の目に露わにされる。

「やあ……」

——家でする時だってこんな格好させられた事、ないのに。

「希、」

絵里が自分のスカートのホックを外し、まるで見せつけるよう

に、下着ごと、脱ぐ。

こんな時でさえ、彼女は、

——綺麗で。

艶やかな金髪が、夏の高い日差しを受けて、きらきらと輝きながら肩から滑り落ちる。

首筋を、伝う、汗。

足を引き抜き、下着を机へと放る。

そして。

そこ、を、

押しつけられた。

押しつけられながら、腰を引き寄せられる。

彼女の腰に力が込められるのが分かった。

快感にしびれたままのそこに、ぐりぐりと押しつけられる。

「んっ………！」

彼女が少し腰を動かすだけで下半身に言いようのない快感が突き抜ける。

濡れそぼったそこが重なり合う。——否、正確には、押しつけられているのは割り入れられた絵里の太ももで、また、絵里の陰部が希の下ろした方の太ももの付け根に押し当てられている。

——熱かった。熱い感触が、分かる。絵里のそこがぬるぬるになっているのが分かる。ぬるぬるになって押しつけられ、こすられ、絵里の口から漏れた熱い吐息が首筋にかかる。

「あ、希っ、………希い！」

「やあ……あああああ、あ……」

達したばかりの希もまた、絵里が強く押しつけるようにして腰を揺らすので、太ももで秘芯がこすられ、熱がこみ上げる。——さつき、イツたばかりなのに。

「は……あ、ん、あつ、」

腰が、だるい。

壁に背を預けているとは言え、腰を突き出し片足を上げたままの体勢に思わず下唇を噛む。

無理な体勢なのに、さつきイツたばかりなのに、それなのに、

「えりち、……あつ、……いやつ、あつ、」

もどかしさが、快感と混じり合い、希を弄ぶ。

だるくてつらいのに、歯がゆさと快感とが混じり合う。

「ああつ、……んっ」

ぬちゃぬちゃといやらしい水音を立てて押し当てられる、絵里のそれ。

眦に涙が浮かんだ。

それは熱く、希を欲する。脈打つのが分かる。快感が、希の身体を深く貫いていく。

「あつ、えりち、……いい！」

「希、……っあん」

そんな声で、求めないで。

ふるふると腰が震え始める。

拒めないのを知ってるくせに。

呼吸が荒いまま、ぐつと目を閉じる。

「……んああ……あつ！」

互いのそこが、互いの太ももに押しつけられ揺すぶられ、こすられ、形を変え、快感となって身体を突き抜ける。

「希」

震える声で名を囁かれ、絵里の中でも熱が湧き上がっているのが、分かる。熱い。熱くて……。

「希っ、んっ、……っ、ごめん、希」

不意に彼女が謝罪の言葉を口にした。瞳を潤ませ、熱い吐息をはき出し、情欲に身をゆだねながら。——激しく腰を振って。

「——ごめん、」

「な……で、謝るん？」

「だって……こんな……」

絵里が震える指で頬を撫でてくれる。——腰を押しつけながら。何度も、何度も。

あるはずのない異質な水音が、生徒会室に響く。ぐちゅぐちゅと、激しく。

その音が希の耳を責める。

その音の中で、絵里の蒼い瞳が悔恨に細められる。欲に溺れる自分を苛むように。

ゆっくりと希は首を振った。

その手を覆うように握り、微笑みかける。

そんな顔しないで。

えりち、大好き。

ぎゅっと抱きしめる。つらいの、へーき、だから。気持ち良くなる、つらいのなくなるから。だから。

ええの。

えりちの好きなように、して。

いたくても、つらくても、ええから。

欲しくて。

いっぱいいっぱい、欲しくて。あなたの、求める通りに。

「えりち、」

囁いて。

「……いっぱい、して？」

快感で繋がれたまま、キスをして。

互いに見つめ合ったまま、

求め合った。

「えり……ちい、あ、やあ……あつ、あつ、」

「希っ……いいの？ 気持ち、いい？」

「んっ、ええ、の。んっ」

「いいの？」

「んっ、」

——のぞみ。

私の名を囁くあなたの声は、あまくて。

贖罪に細められたはずの瞳は、今度はいじわるに細められて。

胸が、うずいた。

#03

「……えり、ちの……ばかあ」

甘い、彼女の——希の、声。

「……ごめん」

脱力した身体で、ふたりして壁にもたれかかる。

ただとにかく熱かった。

壁にもたれながら、彼女が抱きしめてくれ、絵里もまたその身

体を抱きしめ返す。

お互いに荒い息をつきながら、これでもかと酸素を飲み込む。

熱い。

このまま熱中症になってしまふんじゃないかというくらい。

息を吐きつつ、ゆっくり腰を離す。その瞬間、恥ずかしそうに

彼女が肩に顔を押しつけてくるのが、可愛くて。

——と。

「あ、」

「え？」

希が声を上げるので、つられるように絵里が顔を上げると、下唇を噛んで彼女が目を逸らすのが同時だった。視線ごと俯く。

「どうかした？」

「……………」

答える代わりにもしもじと脚をすりあわせる希。

疑問符を浮かべたままの絵里に向かって眉根を寄せる。

「……ちやった……」

「え？」

「えりちのばかあ」

「え？ え？」

謂われのない（？）誹謗に今度は絵里が眉根を寄せる、と。

「換え、ないのにい」

「換え？」

一向に理解しない絵里に痺れを切らせて、鼻の頭をつねられた。

「にや、にやに、希」

「……ばか！」

ぼそりとつぶやかれる。

ニーソ、汚れちゃったやん。

「……………あああああああ！」

つまり。

濡れてしまったという事で……ソックスを汚してしまうほど、

沢山。

「……………ごめんなさい」

「……………もう！」

果たしてそれが罰になるのか、ぎゅうつと抱きしめられた。

……………どちらかというところ褒美なただけれど。

というか、すねる希が可愛すぎて。

ほんぽんと背中をなでる。その背も汗で濡れていて。その熱さ

え、愛おしい。

「……………えりち、反省してる？」

拗ねた口調で尋ねられる。

「してるわ」

「何を？」

「……………」

思い当たる節がありすぎて、つい返答に窮してしまった。

そうしたら今度は脇を突かれた。……………割と強く。

「……………ええと、む、無理矢理……………して、ごめんなさい。あと、

……………汚させちゃったのも……………」

それは正直不可抗力、な気もするが。

「……………あとは？」

「え？ あ、あと？」

もう他には思い浮かばない。

「……………えつと？」

「……………ばかえりち！ ……もう、いっぱい、焦らした、やん」

恥ずかしそうに、耳元で囁く希。それから恨めしそうに上目遣

いでこちらを見上げる。——赤い顔で。

やだなにこの可愛い子。

確かに腰を押しつけながら、イキたそうにしてるのを知りなが

ら、一度達しているから敏感になっていいるのも知りながら、何度

も、焦らした。イキそうになるたびに、腰の動きを止めキスで誤

魔化した。かすれた声で「えりち、えりち」って焦れつたそうに

キスする彼女が可愛くて、……………つい。……………何度も。

そりゃ、あれだけじっくり焦らせば、沢山、出ちゃうわよね。

だけど、えつと私だって焦らしたくて焦らしてるわけじゃなく

てそういう態度がいけないんだけど全然ちつとも分かってなくて

この子はもう——！

「ちよ……………つ、えりつ」

戸惑う唇に口づけをして。——深く。

あんなに何度もキス、したのに、足りなくて。

もっと、もっとあなたを味わいたくて。

「えり……………んっ、」

舌を延ばし、彼女のそれを絡め取って舐め、歯列を愛撫し、唾

液を飲み込んで。全部、飲み込んで。

そつと、唇を離す。糸を引くそれを舌で舐め取って。

見つめ合うと、碧色の瞳が潤むから。

——何度も、した、のに。

——何度も、された、のに。

夏の熱気のせいだ、これは。

そんな言い訳をして。

貪欲な感情をさらけだして。

唇を、交わす。

交わして。

「……えりち、うちばっか、ずるい」

言って、熱っぽい瞳でこちらを見つめる、視線。

——ずるいのはどっちよ。そんな、声。

けれど抗議する前に、やわらかな身体を押しつけられ、反論さえ出来なくなる。肩を押され、身体を反転させられ、壁に背を押しつけられる。

「のぞ——」

「お仕置き、やよ？」

意味が分からなかった。いや、言葉の意味は分かる。さきほど

散々焦らせたことへの罰だと言うなら——

「希！」

彼女のやわらかな身体を押しつけられながら、その手が、伸びた。シャツの上から腹部を辿り、——そこへ。

背は壁で遮られ、逃げられない。

濃厚なキスのお陰でで少しだけ熱を持ち始めていたそこを、彼女の指先が、つ、つと辿る。

ああ、どれだけ彼女に対しては貪欲になれるのだろう。

いつも馬鹿みたいに自分を律して責めてばかりいるのに。こんなにもあっさり、我が儘な熱が沸くなんて。

「希……だめよ……」

形ばかりの抗議をして。

——本当は触れられたくてたまらないのに。

「だめ……や、ない、みたい、やん？」

「んっ！」

人差し指と中指をクレパスの中に押し込められて、きゅつと、先をつままれて。先端を、いじられる。くにくにと指が、動く。

「………のぞ、み」

「ん？ なに？」

やわらかく微笑まれて、優しげな声に反応してしまう。

けれど、動きはひどく緩慢としていて。……ずるい。

——彼女は嘘つきだ。

自分が意地悪なら、彼女は嘘つき、で。

しれっと嘘をつくのが、上手い。……それは優しい嘘ばかりだったけれど。

今も。

気付いてない振りをして。

少しずつやんわりと、触れて。

——分かるでしょう、どうなっているか。そんなふうに、焦らさないで。……ねえ。

「のぞ、み……」

「ん〜どないしたん〜?」

いつもと変わらないのんびりとした声が、ずるい。

目は逸らさない癖に。

彼女の細い指が、何度も、往復して。

堪えきれなくなったのは、絵里だ。

「――挿入れて、希」

切羽詰まった声に、ふっと微笑む彼女。優しげな笑みなのに――扇情的で。希の手の中で、硬くなる、小さな芽。

「ん〜固くなってきたんと、ちがう?」

分かっているくせに。

「……ばか、」

熱が、はき出される。

思わず、腰を押しつけてしまう。このまま――

このまま、希に手でイカされたい。希の手でイキたい。イカされたい。

「希、」

何せ希は、

「ん〜?」

――上手く、て。

はじめてしてもらった時からそうだった。どうしたら気持ちええん? って聞いてくれて、こちらが焦れるくらいに丁寧に愛撫してくれて。こちらが誤魔化そうとしてもそうさせてくれなくて。

こちらの僅かな変化に、ここがええの、って、優しげに微笑んで。ここ、ええんやね、って。

「……希っ、して……!」

「してる、やん?」

――焦らすところばかり。

そんなふうに、

「……腰、動いとるよ? 気持ちええ、の?」

微笑まないで。

「して……! お願い、希、して……」

我慢の限界だった。絵里はそこをさらに押しつけようとして、抵抗を失った。

「のぞ……、だめ!」

彼女が膝をつく。

そして。

浅く開いた唇を――

「だめ!」

抵抗をする前に、そこに口づけられてしまった。

「希、だめっ」

舐められた。その感触に、手とは違う感触に、ぞくりと快感を感じてしまう。……だめなのに。こんな。希にそんなこと――学校で、希に、口で、なんて。

「ひて、って言うたやん」

口に含まれたまま言われて、下唇を噛む。

舌がクレバスを割って進入する。指とは違う、ぬるぬるとした感触に快感がこみ上げる。反論出来ないのいい事に、舌で愛撫される。

「んっ……、……ああっ、あっ」

まるでそれ自身が意志を持った生き物のように、割れ目の中をうごめく。

大きく口に含まれて、舐められてすすられて、腰が震えた。ぬるぬると——ぬめる。ぬめって吸われ、熱がこみ上げていくのが、分かる。

「あ、……だめえ、希いつ……」

「ん……えりち、やって……口で、してくれる、やん」

——それは、そうだけど。

何度も、口で、彼女にした、けど。

こんなの。

跪き、従順にそこにキスする彼女は——

「ああっ、希っ希っ！」

いけないと思っっているのに、興奮している自分がいて。

濡れそぼり、溢れたそれを彼女が飲み込む。上下に往復する感

触に腰が震える。

「あああっ」

——たまらない。

「希っ希っ」

名を呼ぶだけで快感が増すような気がした。希が、私の。

指が、クレバスを割る。そこを大きく開かれ、ぷっくりと膨れ上がった芽が剥き出しになる。次に起こる事を予期し、熱がこみ上げ——、

彼女の舌が、その芽を甘く突き上げた。

「やあああああ」

舌の先がぐりぐりとそこを刺激する。指ほど明確な刺激ではなく、それでいて甘く、何度も何度も突き上げられる。

「やつ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、」

舌の動きに合わせ、声が出てしまう。

もう耐え切れそうにない。

絵里は懸命に身体を引いて、それを希の口から離させる。けれど

どすぐにまた舌が追いかける。

「だめ、もう、」

——が。

彼女の呂律の回らない口から出た言葉に、ぞくりと身体が疼いた。

「えいち、口でしゅるのと、指でしゅるんと、どっち、ええ？」

どくり、熱が沸く。

頭の血がすべて沸騰しそうだ。

このまま——と過ぎらなくもなかったが、そうじゃなくて。ど

うしたいかなんて、決まっている。

堪えて引きはがし、彼女を押し倒す。さすがに床はまずいと思

い、書類の置かれたままの——机の上に。

書類がくしゃりと音を立てる。机の軋む大きな音がした。けれど気にしている余裕はなかった。

机の上で希の脚を開かせる。膝を曲げた形で大きく開かれ、露わになるそこ。確認するまでもなく愛液でぬめっていた。

そこへ指を宛がった。愛撫なしに一気に押し込む。

希のそこが、みるみる飲み込んでいく。

「んっっっ、」

躊躇なく押し込まれる感触に、希が甘い悲鳴を上げる。絵里を圧迫する熱。

一瞬で奥まで突き刺さっていた。

希のそこに、自分という存在が押し込まれていて。

——熱い。

「希も、して」

狭い机の上で不安定な体勢のまま、片足を椅子に乗せ、彼女の片足を跨ぐ体で脚を開く。

中で指がうごめく感触に瞳を潤ませながら、希が手を伸ばす。触れ、綺麗に爪の切りそろえられた指が、——押し込められる。

「あ……………ああ……………」

絵里は手のひらごと、腰を希に押しつけた。深く、指が沈んでいく。また、それに圧迫され、絵里の指も希の中へ深く押し込まれた。

身体の中の奥で希の指を感じ、指先で希の中心を感じる。

「希い……………」

「っ、っ、っ、っ、っ、っ、っ、っ、」
絵里は激しく腰を振った。ギシギシと机が鳴く。

絵里の腰の動きに呼応して希が鳴く。

互いを繋いだ部分から激しい水音が立つ。ぐじゅぐじゅと互いのものが混じり合う。

「希っ、希っ、」

絵里のクレバスからも愛液が溢れ出していた。感じていた。希——を。

何度も激しく突き上げる感触が快感に変わり、希の腰が震えた。開いた脚までもが震え出す。絵里は希と融け合いながら、全てを——

手放した。

身体を起こそうとすると、ぼたりと希の裸の腹部に汗がしたたり落ちた。

希は達したまま開いた脚を下ろすことさえ出来ずに、荒い息をついていた。

つながり合ったそこが、熱い。おまけにいろいろな液体でどろどろになっており、正直、ひどい。

絵里は繋がったまま、希の名を呼んだ。

深く息を吐きながら彼女がこちらを向く。どちらからともなく



キスをし、負担にならないように気を使いながら、腰を浮かすようにして、彼女の大きく上下する胸に身体を重ねた。つながったそこも、鼓動も、どくどくと脈打っているのが分かる。――互いにそれを感じた。

どくん、どくん。

どくん、どくん。

やがてそれが、とくん、とくん、と小さくなり、そのうちに分からなくなった。

そうなってから絵里は指を引き抜いた。多分、希が起き上がるとまた垂れてしまうだろう。そう思ってくすりと笑った。

笑みに気付いた希がえりち？ と名を呼んだ。それと同時に希の指もゆつくりと引き抜かれる。

絵里は思った。

ああ、私、希に名を呼ばれるのが好きだわ。

えりち、って。

変わった呼び方ね、なんて最初言ったけれど。

「希」

「……なん？」

「好きよ、希」

そう言うと、あなたが何て言うか分かっているから。

「……うちも、大好き、えりち」

絵里は胸の中があたたかくなるのを感じながら、花開くように

微笑んだ。

#04

さすがに、痛まなくは、ない。

回数も、だけど、えりち、いつもより激しかったし。

でも、と希は溜息をついた。

あの後大急ぎで、身体を大量のパウダーシートで何度も拭き、再度制服を着て、部屋を片付け、しわの寄った書類をのばし、すでに昼食を食べる時間はなかったため、慌てて部室に向かった。

色々なものでどろどろになってしまったため、ニーソックスは脱いだ。

あれだけ目立つものをはいていないと流石に目を引く。案の定、部室にいた面々のうち、こちらの方を向いていたことり、穂乃果の二年組と花陽、真姫らがあれっという表情を浮かべた。そして穂乃果が口を開きかけた瞬間、にこが思いつつつつつつきり顔をしかめたまま、部室の外に連れ出してくれた。

「希、あんたねえ……信じらんない。時間と場所、考えたら？」

「な、なんの事なん？」

「………ひとにあんだけわしわししといて、わしわしし足りなかつたんだあ？」

「なんの事かわからへんなあ」

「ああもう、ふっさけんじゃないわよ！ 今日の練習ちよつとでも手を抜いてみなさい！ にこがしごき倒してあげるからっつ！」

そう言い捨てる足音も荒々しく同級生が部室へと戻って行った。

……今、理由を聞かれたらうまく誤魔化せる自信がない。正直助かった。――が。

正直、痛む。

身体も、怠い。

それを察したにこが、柔軟の際、思いつき背中を押してくれただものだから、希は苦笑するしかなかった。

ちらりと絵里を見ると、存外しれつとしている。そりゃ、長くバレエをやっていた人だし、体力が違う。先にへとへとになっているのはいつも自分の方で。そう思った瞬間、にこに頭をはたかれた。

「あいた！」

「どこ見てんのよ、この色ボケスピリチュアル女！」

「いやあ、柔軟する姿もかわええなあ、思うて」

「はあ？ほんとにしびき倒すわよ、あんたあ！」

「——そこ！ふざけてないでしつかり柔軟して下さい！」

にこが怒りの声をあげた途端、海未のお叱りが飛んで来る。

「ああもう、あんたのせいで叱られたじゃない！」

ますますにこが怒った。

周囲に声は聞こえないものと調子に乗ったのはまずかった。希は苦笑を浮かべると、ごめんなあいつもの調子で謝った。

このちっこい同級生にふたりの関係のすべてを話したわけでは——ない。

ただそれでもなんとなく察しては、こうして叱ってくれるのが嬉しかった。

希は顔を上げた。

新学期はもうすぐだが、まだまだ今日も暑くなりそうだ。

Epilogue

相当にこにしぼられているようだった。

柔軟の間、ちよくちよく盗み見たのだが、希がにこに小言を言われていた。あまりそれが酷かったものだから、さすがにあまり希を責めないでと一言言おうと思った時、真姫に肩を掴まれた。

「ほっときなさいよ。ただじゃれ合ってるだけだから」

「でも……、集合に遅れたのは私もだし……」

そう言った時、ちらりと真姫の視線が刺さった。

「——馬鹿ね。余計、火に油を注ぐわよ。……ほんと鈍いんだから」
どこが似てるっていうのかしら。

ぼそりと言った真姫はそのまますたと輪の中に行ってしまった。
う。

なんのことだか分からずに絵里は首をひねった。

鈍い？ 似てる？ なにが？

それにしてもにこは何を怒っているのだろうか？ 絵里を呼び

に行った希の帰りが遅かった、そのくらいであそこまで怒るものだろうか。ましてや二人の関係を知らせていないにこが、何かを察しているはずもない。

「……………」

それに真姫の様子もなんだか変だ。

時折こちらを見ては、顔を赤らめたりしている。……帽子の影で分かりづらいけれど。

それにことりも。こちらを見ては時折、満面の笑みを向けてくる。

花陽にいたっては、目も合わせてくれなくて。

……おかしな人たち。

いつもと変わらないのは、穂乃果と海未と凛。

絵里は釈然としなかったが、うん、と伸びをした。

それにしても、なんだかか身体が軽い。あれだけ激しい運動（？）をしたというのに、怠いどころかよく身体が動いた。

——多分、希はつらいでしょうけど。

なんだか申し訳ない。求め合ったのはお互い様なのに、遅刻して小言を受けているのは希だけだし、身体だって負担が大きかったのは彼女の方だろう。

「まだやってる」

にこと希は相変わらずだ。希が何か言うたびにこが顔を真っ赤にして小突いたりしている。

けれど愛しい人を見て思う。

——彼女がいて、本当に良かった。

直ぐに考えこんでしまう自分の背を、そっと押してくれるのはいつも彼女だ。

彼女はいつだってにこにこと微笑みかけてくれ、支えてくれる。——どんな時も。

「希、にこ、練習はじめるわよ！」

声をかけると、ふたりが気付いて顔を上げ、希がにっこりと微笑みかけてくれた。それだけで心の中があたたかくなる。口元がかすかに動く。

えりち、だいすき。

それに微笑み返す。——と。

何故かにこが希の頭をぽかりとはたいていた。

「ほらほら、みんな、集まって下さい！ 今日の練習始めますよ！」

海未の号令にみんなが、はいっと返事を返す。

絵里は顔を上げた。

新学期はもうすぐだが、まだまだ今日も暑くなりそうだ。

No. _____

Date: _____

あとがき

お読み下さりありがとうございます。嵩乃朔（タカノサク）と申します。……なんていうか、平たく言うとのんたんとエリチカがホテル生徒会室でいちゃこらしてるだけのお話ですすみません。……うか、まじエリチカさんストレスたまってるんですかね、随分攻めっ気が強いんですねすみません真夏のせいだよ
いやもうただのんたんがエリチカの事好きすぎてなんでも受け入れちゃってあんあん言わされるだけの話を書きたかっただけなんです、ヒデーなおい。

最近二人が好きすぎてあかんです。二人が好きすぎてたぬきやらキツネやらを見るだけでほっこりしちゃって困りますのんたぬかわゆる。相変わらずスクフェスではおかしいぐらいに希と絵里が出て来ませんおかしいです。

そんなこんなで次回は受かっていれば冬コミです。でも受かってなくても出します。相変わらずふたりがいちゃこらしてるだけのお話になると思います。
ではでは。

嵩乃朔

夏の終わりの、熱い熱い日に

You gave your heart to me, so I'm gonna give you mine.
I had no idea about this side of my personality either until I met you that it.

LOVELIVE! ELI & NOZOMI

Saku Takano

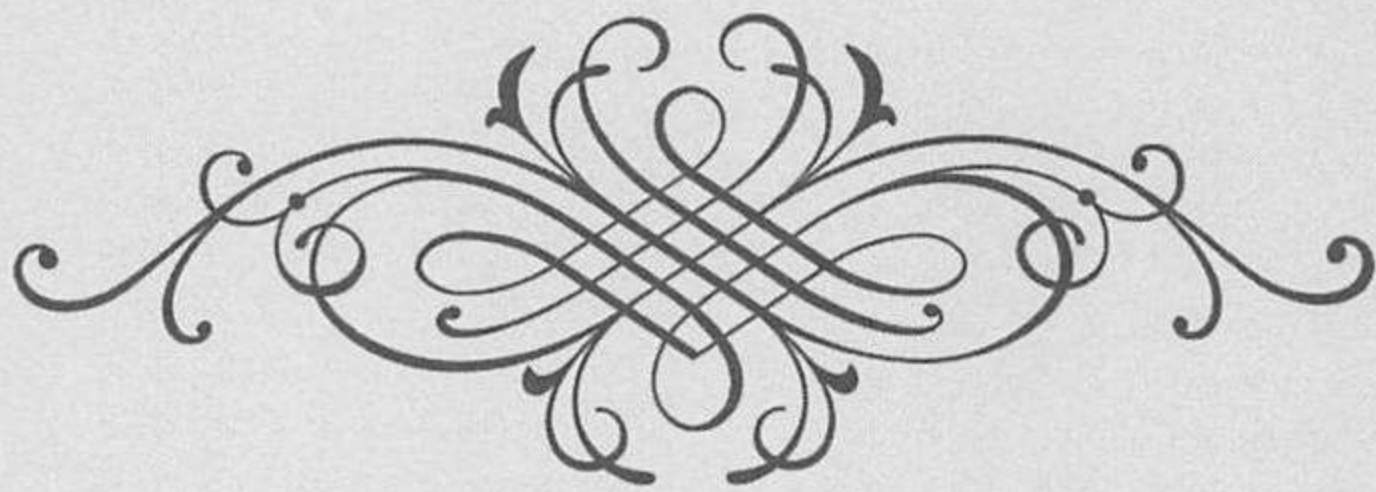
2013年10月14日発行

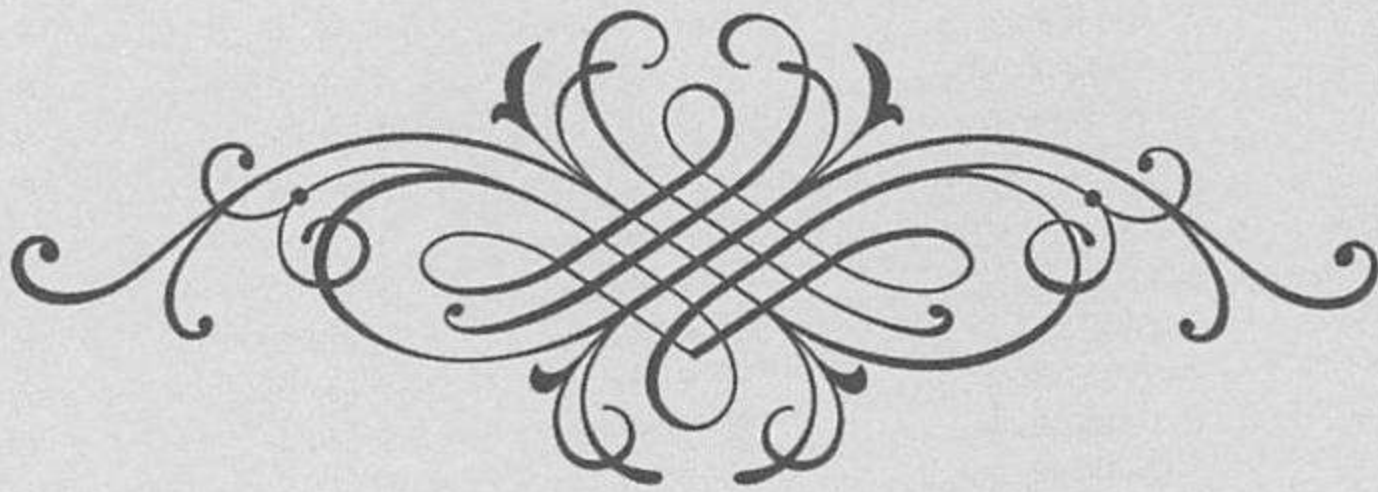
発行 嵩乃翔 / Waterfall

s.takano.wf@gmail.com

<http://unmoral.sakura.ne.jp/waterfall.html>

(Pixiv) <http://www.pixiv.net/member.php?id=2675148>



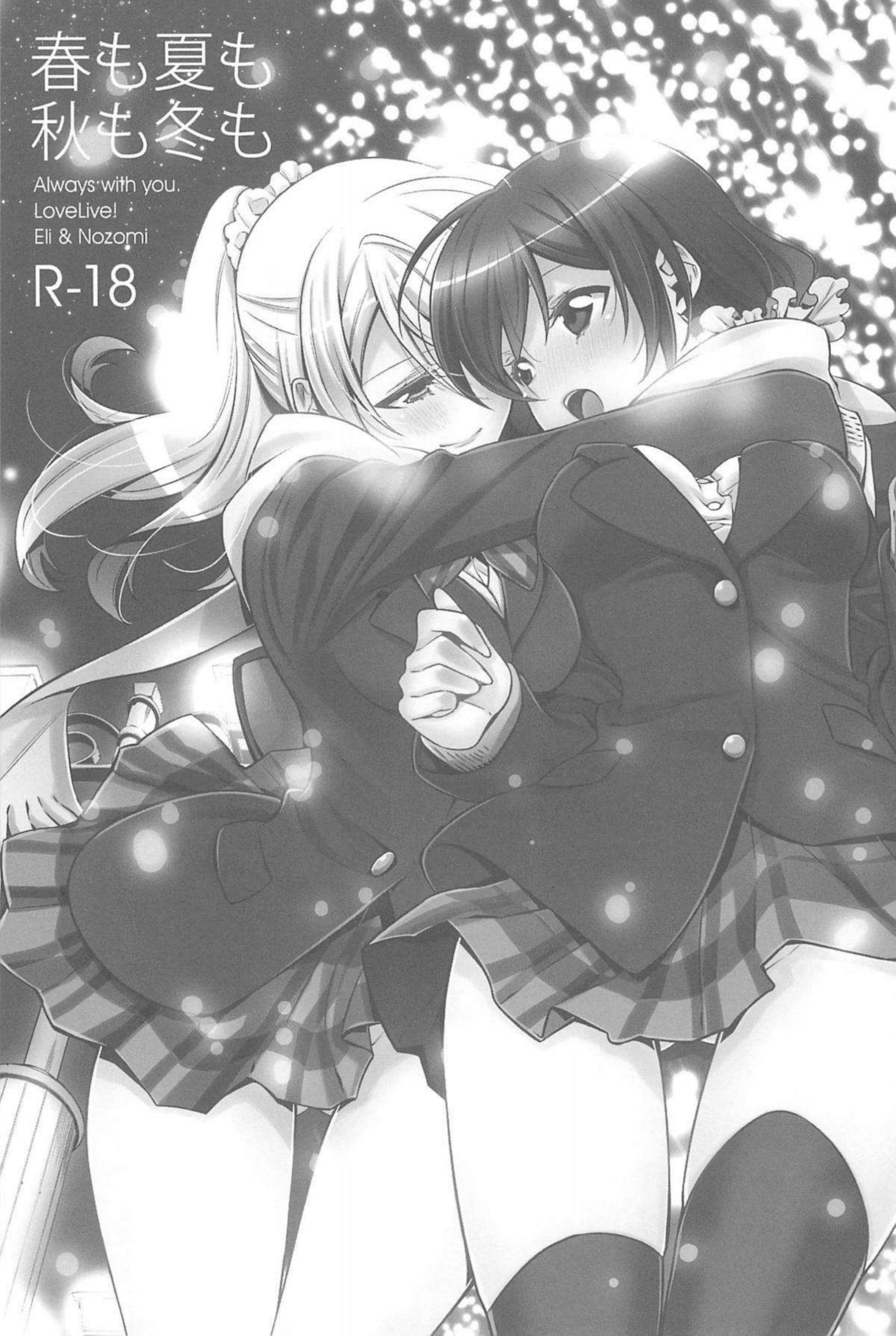


本書「春も夏も秋も冬も」を描いた2013年冬当時、まだのんたんの家庭環境等えがかれる前でしたので、のんちゃんの住んでるマンションにおばあちゃんが同居している設定で描かれています。…すみません><
ご了承の上、お読み下さいませ。

春も夏も
秋も冬も

Always with you.
LoveLive!
Eli & Nozomi

R-18



それはなにげない日
なにげない教室

そこにはなにげなく



当然のように

もうすぐ……か

あなたがいて

え？
どうしたん？

もうすぐ卒業

……なのね

ちくし



ちんちん

ああ……
せやね

夕方の誰もいない教室のにおい

白くぼんやりとした黒板

遠くひびく部活動の声

それは本当に
なにげない日常だけれど

東條 希

掃除子エック

・黒板
・床

隣には
あなたがいる

ちん
ん

ちん
ん



神様

なにげない日常なのに



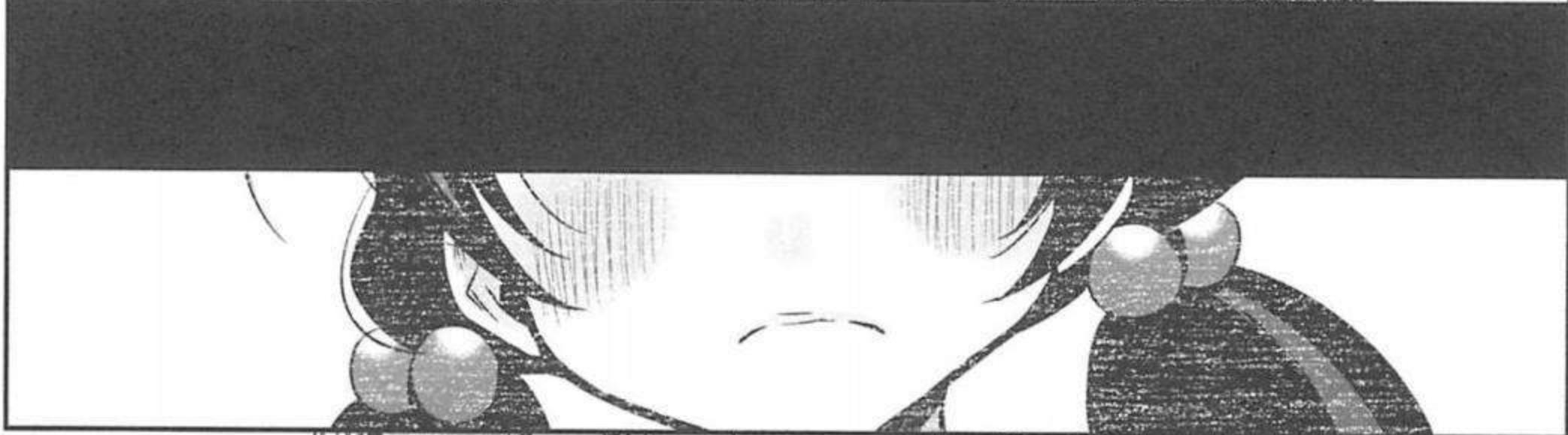
胸が痛いです

ちん
ん

……ああでも
なんやなつかしいな

え？

中学まではうち
転校ばっかしたったから
よくこんな気持ち……
感じてたなあ——て



でも

—でも

飲み込んで

さみしいとか
悲しいとか
—もつと

ほかの気持ちとか

全部

だってほら
嫌やん

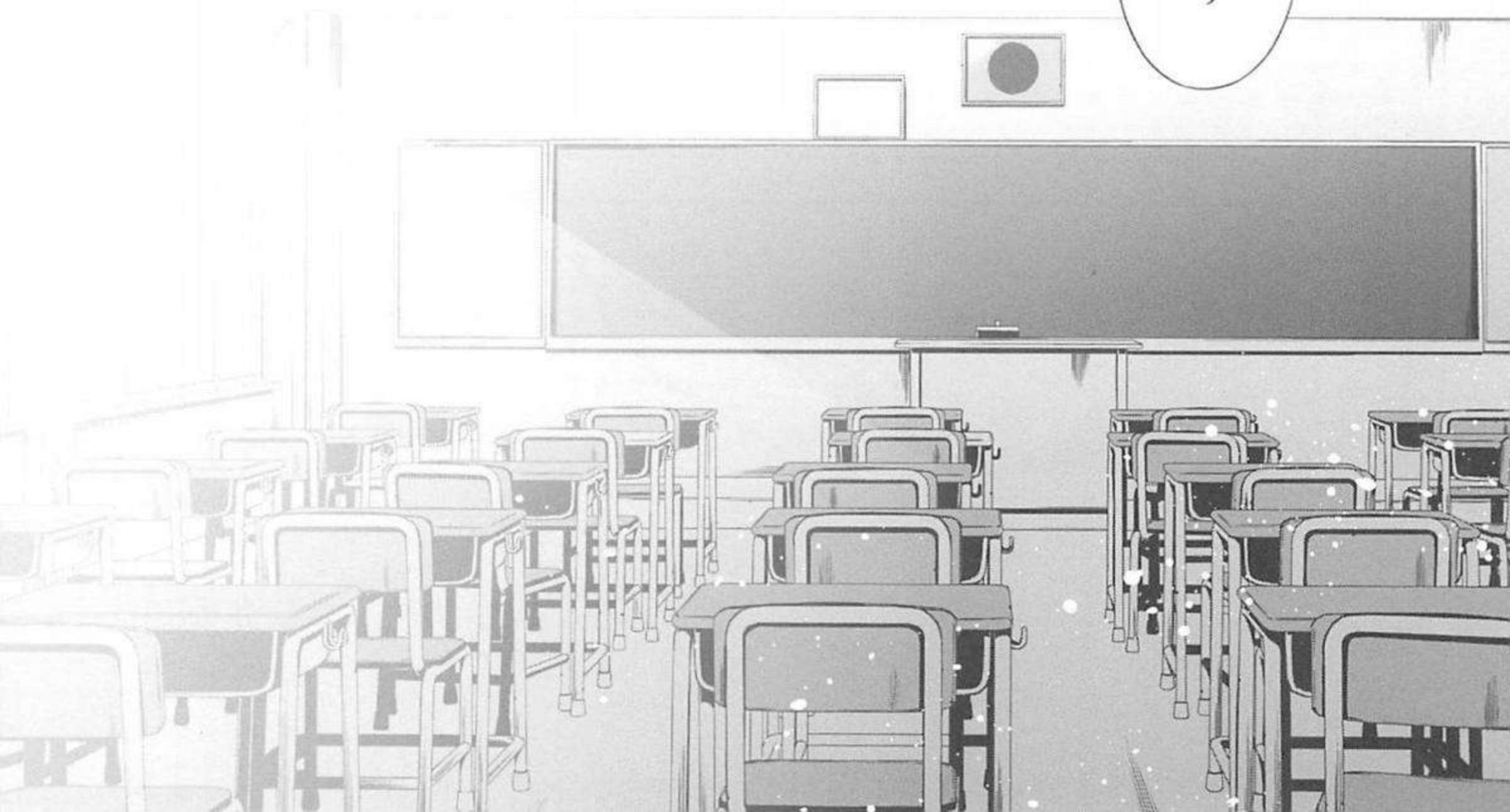
誰かの重荷に
なるとか

高校はずっと
音ノ木で……
ずっと一緒に

だから

平気だよって

でももう





終わりなんやね



さーて
日誌も書き終わったし

—帰るか！

……ええ

……えりち

それは息をするように

息をするみたいに

あなたを好きになった

少しいじっぱりな
ところとか

頑固なところとか

生真面目すぎる
ところとか

全部





全部
好きだったんだよ



寒いわねー

ほな えりちも
ニーソにする？

私は希ほど
寒がりじゃないしなあ

えんーっ
あったかいのにい

はいはい

……3年間

はじめて
3年もおなじ学校で
過ごして

そしたら

あなたがいて

息をするみたいに

自然に惹かれて



この気持ちが
なんなのか
分からなかったけど

独占欲とか

嫉妬とか

そんなものなのかなって

思ってたけど



違うんやなあって

思うんよ



あなたを見てると

違うんやなあって

ちくんって
胸が痛くなってる

—でもな

女の子どっしりなのこね

おかしいな



ちゅん

胸が

ちゅん

ちゅん

ちゅん

ちゅん

痛くて

いたくて

いたくて



希

どうかした？

まさかこの時期に
風邪とかやめてよ？

ほな、

風邪なら
よかったんやけど

……希？

この気持ち

ほな ほんまに
風邪ひいてしても
あかんし……帰るか

風邪みたいに
治ってくれたら

希

…なにかある
んでしよう？
……言って

えり……

……

……言つてよ
何年親友
やつてると
思つてるのよ

あー
ばれてもーたか
めっちゃお腹
すいたな——つて

親・友・

希

何か……
あるんでしよう？

……言つてよ

あります

あなたが好きです

誰よりも



けど

言われへんねん

絶対



せやから

……なんもあらへんよ

希!

ほんまにほんま

希……

希っ!





……なんで

……なんでよ



……っ
いつも……
そうやって……

……

ああ……
うち……
だめやなあ

また

えりち
泣かして
しても



……ごめんなさい

私

えりち……

うちな
えりちが好きやった

ずっと好きだった

ずっと

—だから



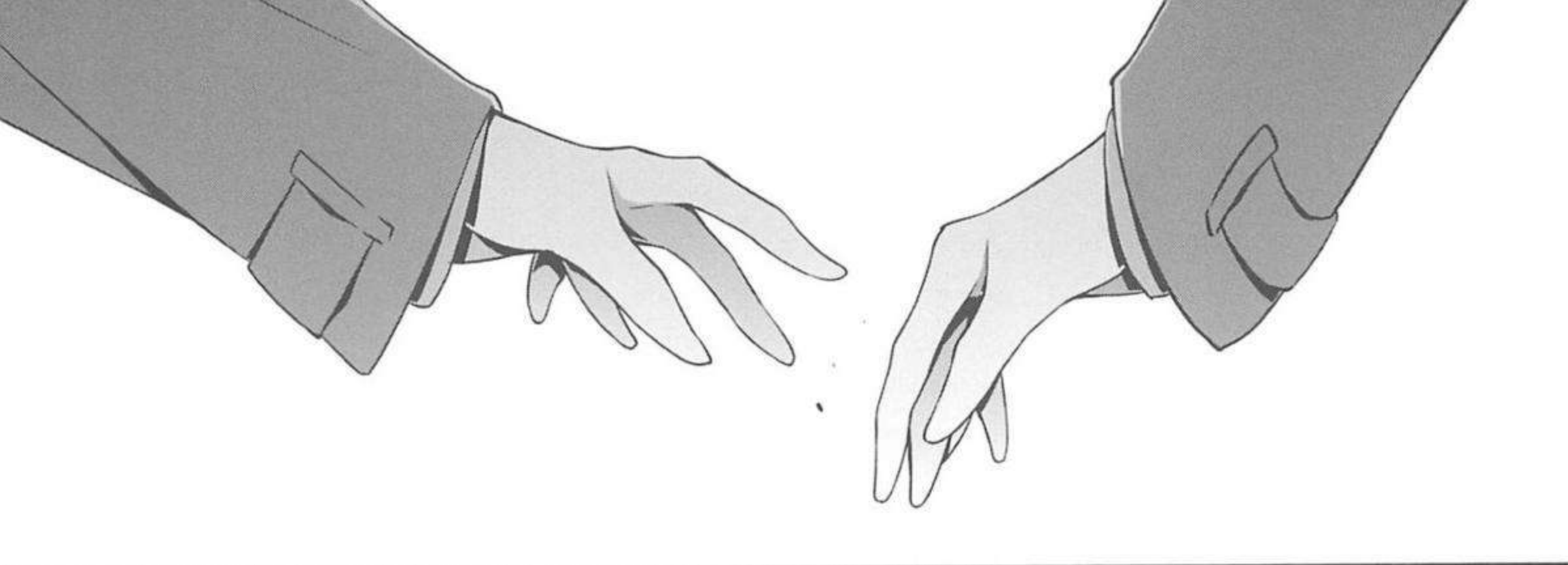
……ごめんな
えりち



うちの方

あやまるのは







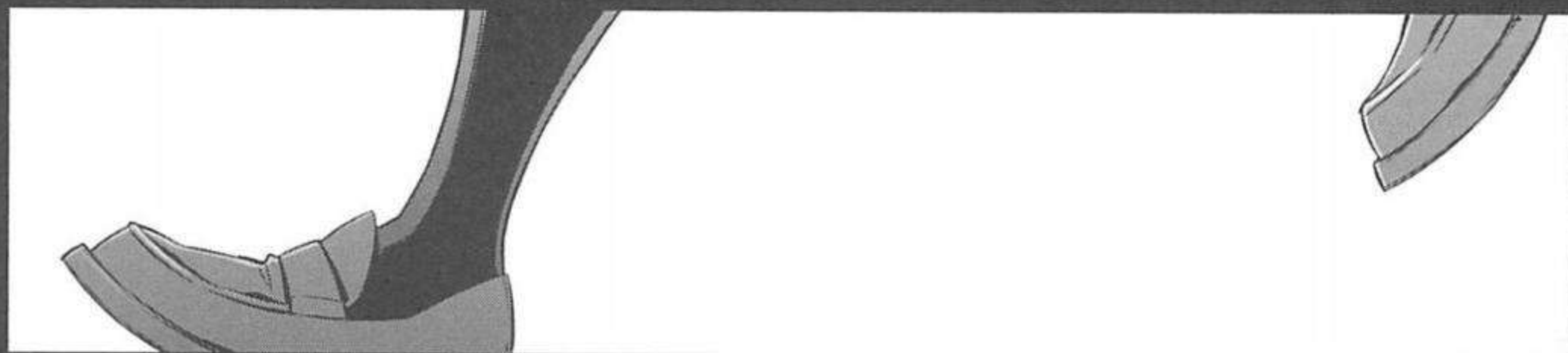
ほなな

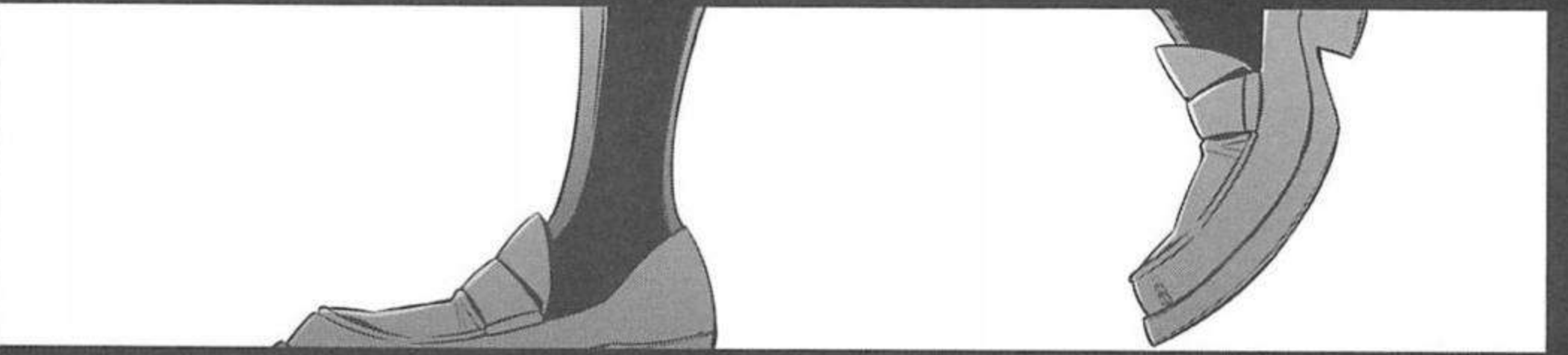
さよなら

ほなな



うん
慣れとるからだいじょうぶ





あ
……



雪……や



はは……

猛暑だったり
いきなり寒くなったたり
今年のはんま
変な年やねえ



秋も冬も

……春も夏も

また春も



ずっと一緒で

……でも

きょうはなご









え……
えりち

どうし——



……ずっと
外におったん？

も……もう！

この時期に
何考えてるん？

ほんまに風邪
ひいてまうやない！

希

私
ずっと考えてたの



……え

……というか
怒ってたの

えり——

14



ゴッ



ばか
なんで逃げたのよ



……え



普通あそこまで
言われて
誤魔化す？



私だって

はあ

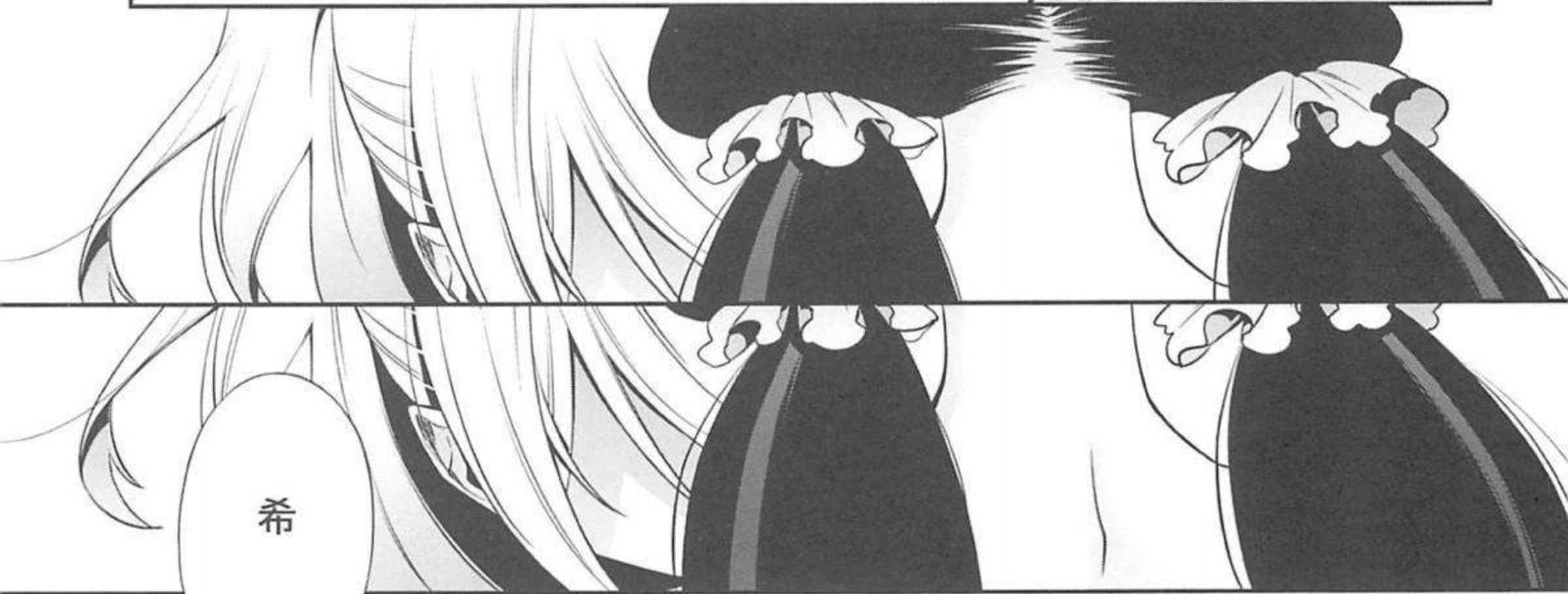
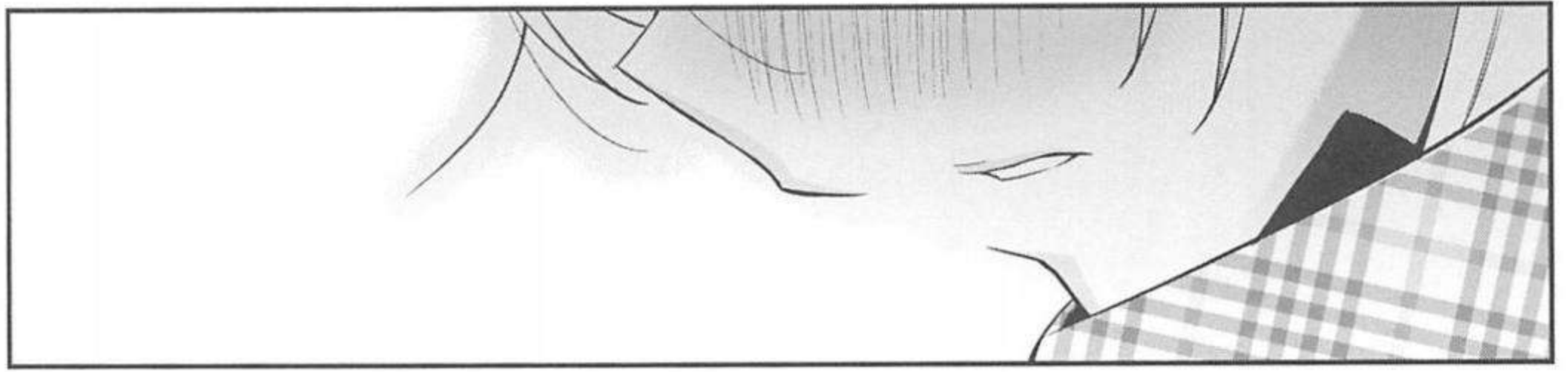
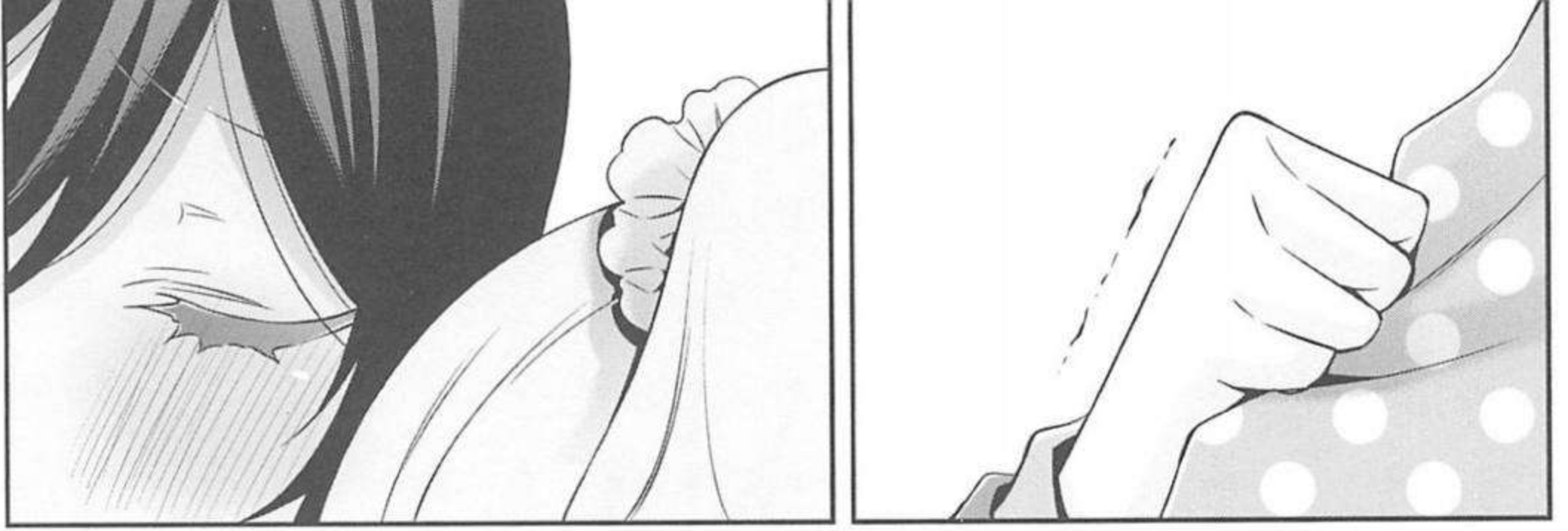


不安……
だったんだから



私だって……

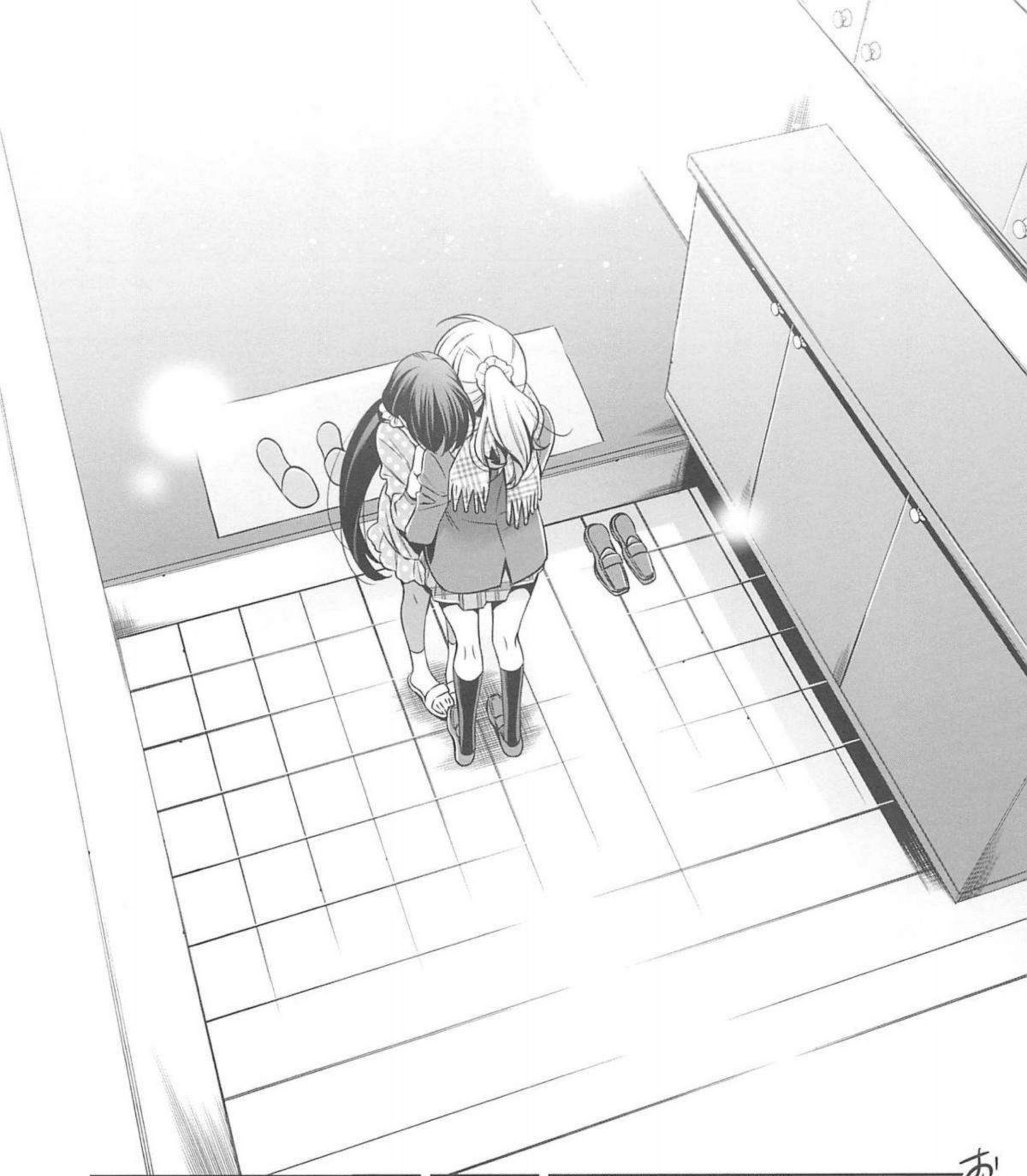
いつも……
本音なんて
言ってくれなくて











おや

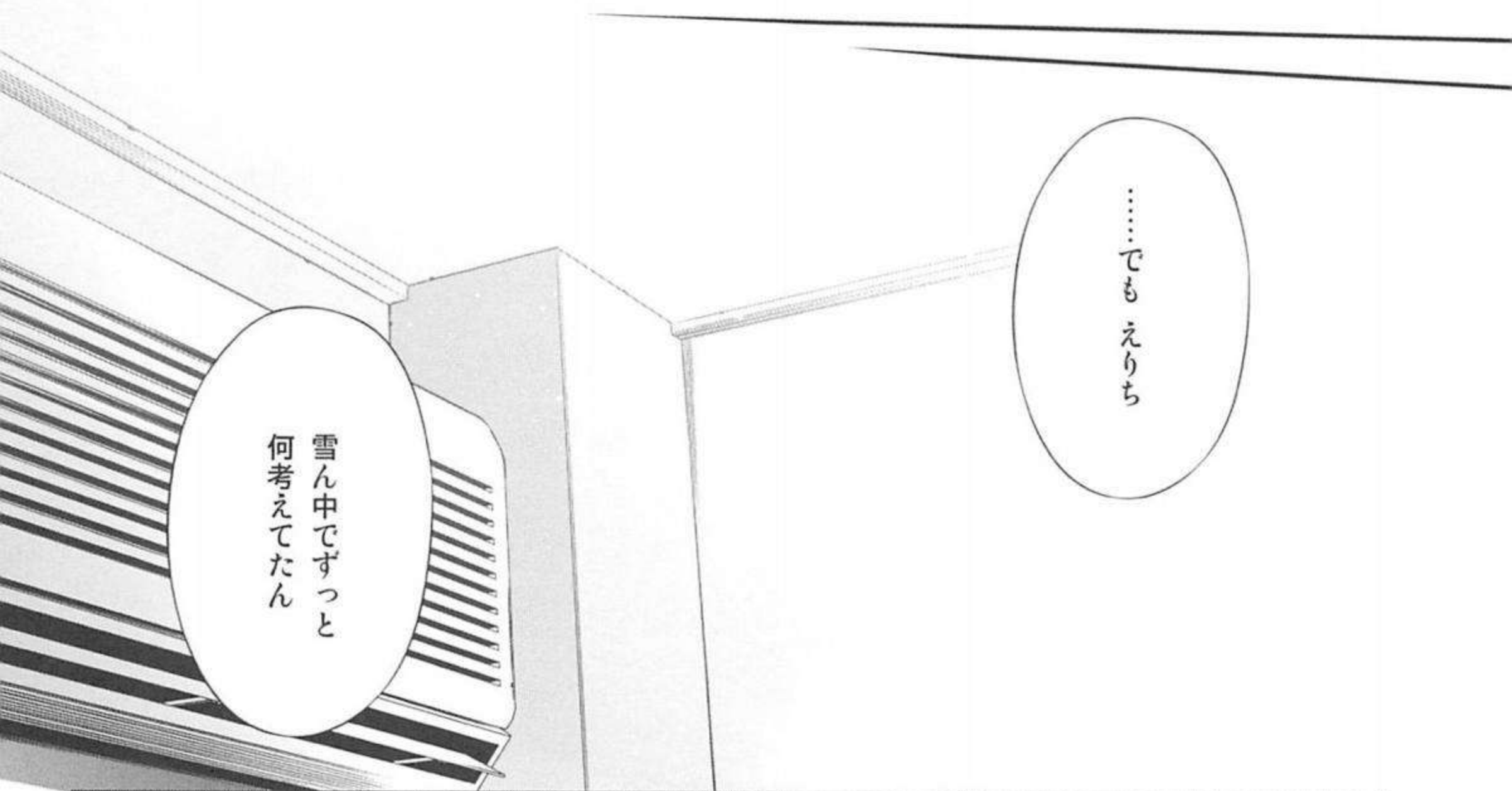
希……
お客さんかい？

……

ゆっくりして
おいぎ

あしあしあしあし

おまかせ



……でもえりち

雪ん中でずっと
何考えてたん



ああ私
怒ってたのよ

え？

あの場面で
お腹すいたって
何よ

や……はは



普通あそこまで
言われて言う事が
それとかどうなのとか

告白したくせに
逃げ帰るとか
何なのとか

……

そしたら

雪が降ってきて



ロシアの冬とは違うけど
東京も寒いよね
寒さの質が違うっていうか

……うん？

——で思ったの
雪が降っても
降らなくても



毎年

希と一緒に
いたなあって

……でも





今は
隣にいないんだ
なあって

それで
思ったの

ああ



ずっと一緒に
いたいなあって

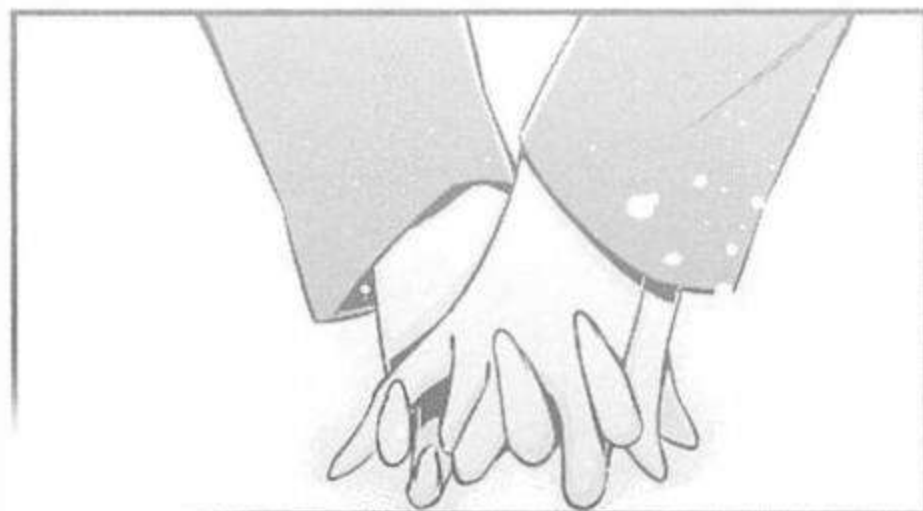




ねえ

これからも

これからも



私たちは

あのえりち……

ちよつと……
また逃げる気？

ちゃ……
ちゃうねんけど……



うっ……うっ

ほ……ほんまに
えりちの事
ずっと……

す……
好きやったから……

もじもじ

ど……

どうしてええか……

もじもじ



あの……ごめん……

もじもじ！

また謝るんだから
……大丈夫よ

や……やけど

もじもじ



ねえ希



あなたはすぐに
自分の事は
後回しにして
しまうけれど



あなたが私の背を
押してくれたから
私は私でいられたの

だから――

今度は私が
あなたの背を押してあげる



――ね？



……えりち



えりち……

うち……

ふん



ふん

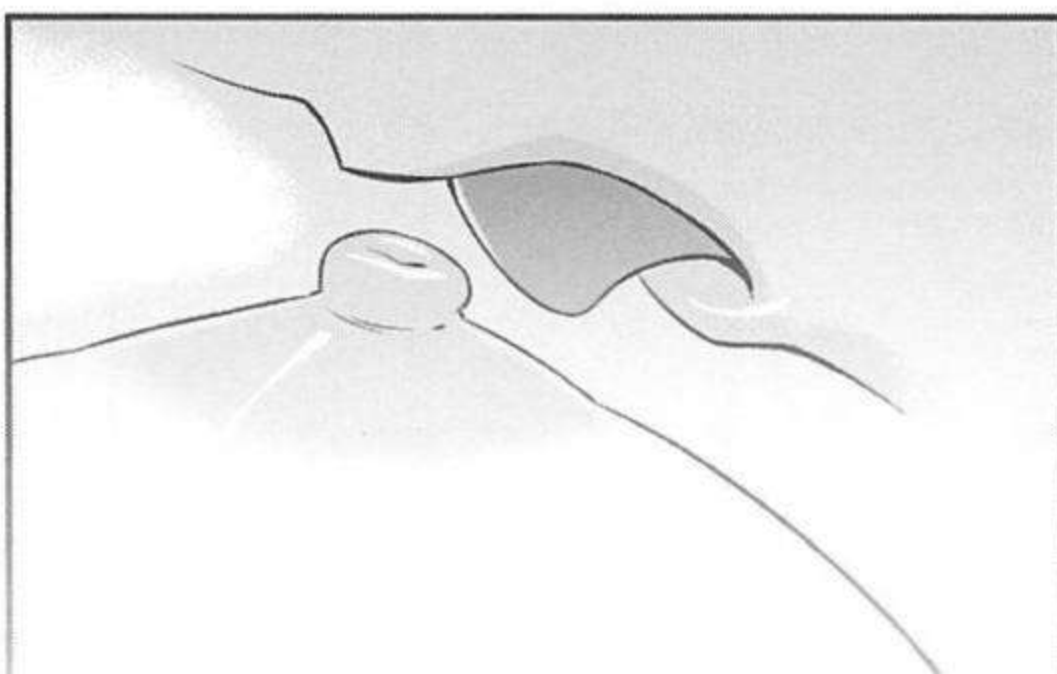


ふん……



好きやったんよ









はずか……

あの……

えりっ

せ……んご……



えりち……!

ん……っ

え……っ

ん……っ

ちゅっ
ちゅっ
ちゅっ

ちゅっ
ちゅっ

ちゅっ……っ

ちゅっ
ちゅっ



す……く……

は、

は、

は、

は……



えり……

は、

は、

は、

……はげし……



は、



希...

すっ

はっ

.....えりち.....

はっ

はっ

はっ

はっ

希

はっ

はっ.....

はっ



はっ

えりちに見られて…

や…

はっ

はっ



やだ…

や…

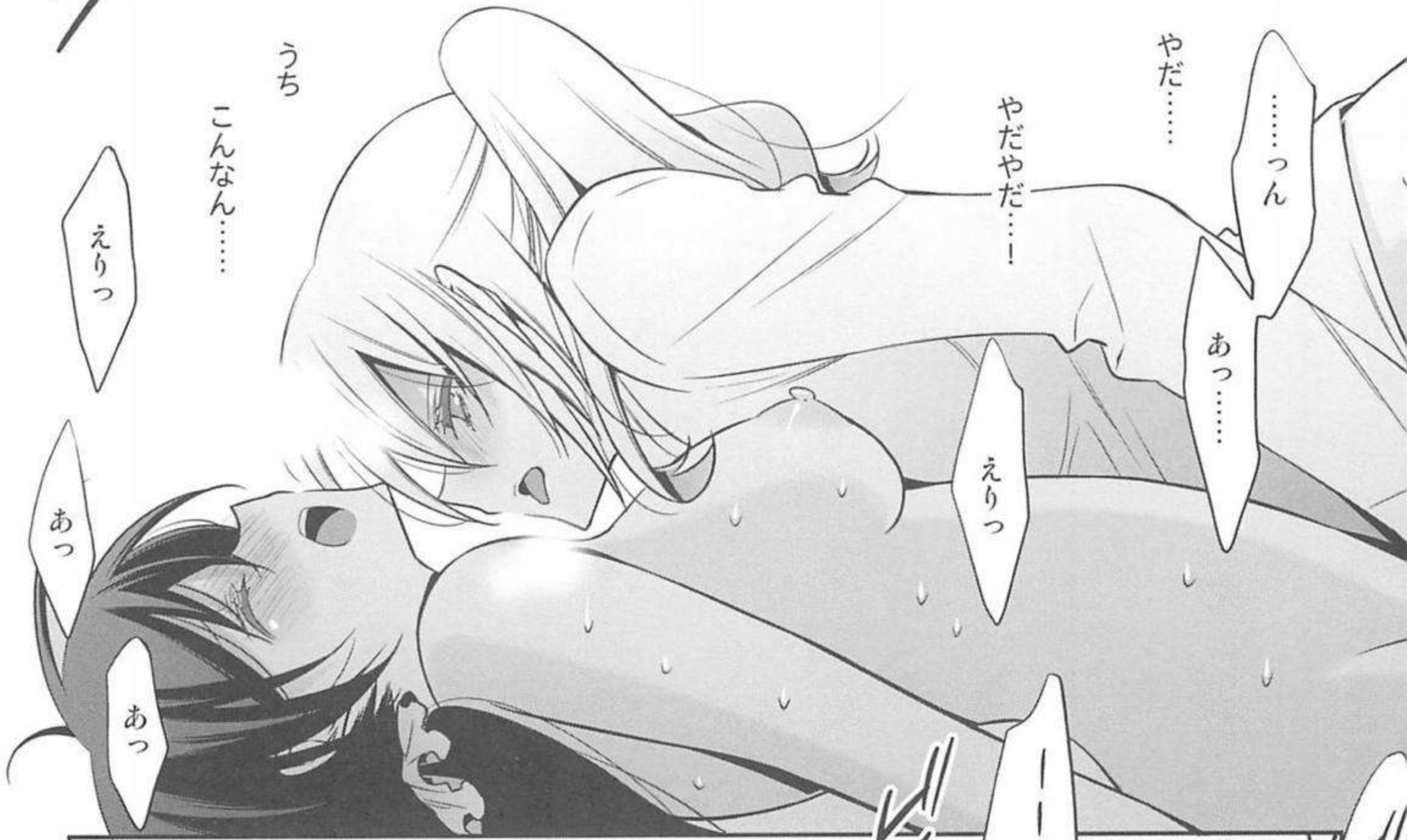
あ

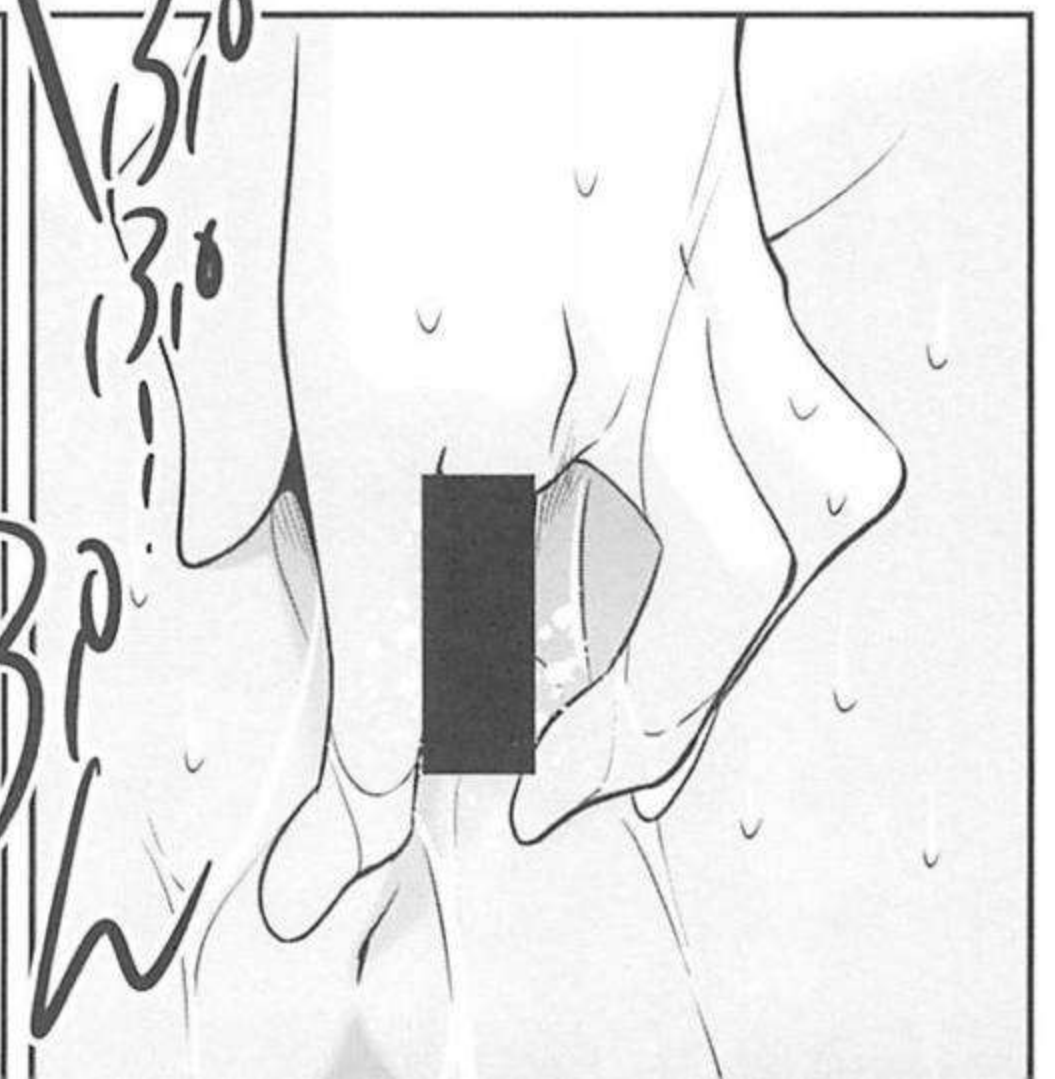


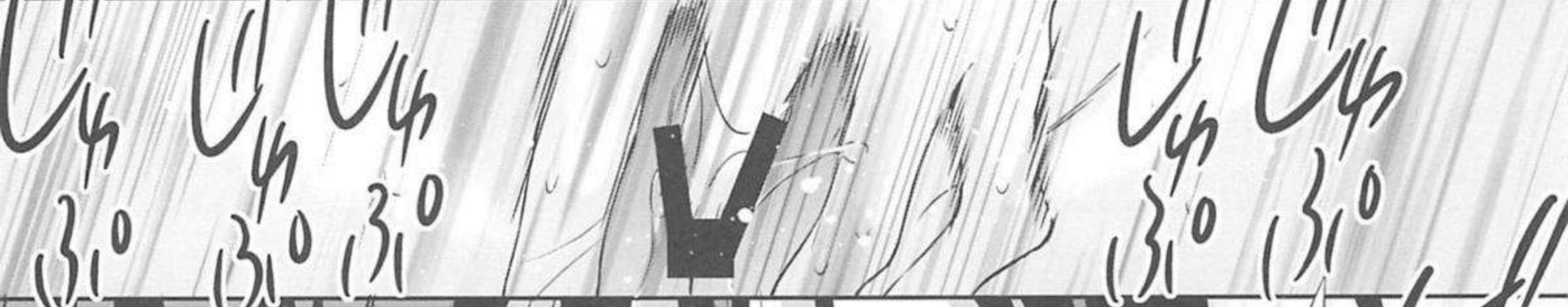
えりちが…



うち…!!









えりち……

は、

は、

は、

……

は、

……あかん……
はずかしすぎて
えりちの顔……
見れへん……

希……

……つち見て

……



……好きよ

生徒会長と副会長で

親友で

これからも他にも
肩書きは増えるのかも
しれないけど

……つちも

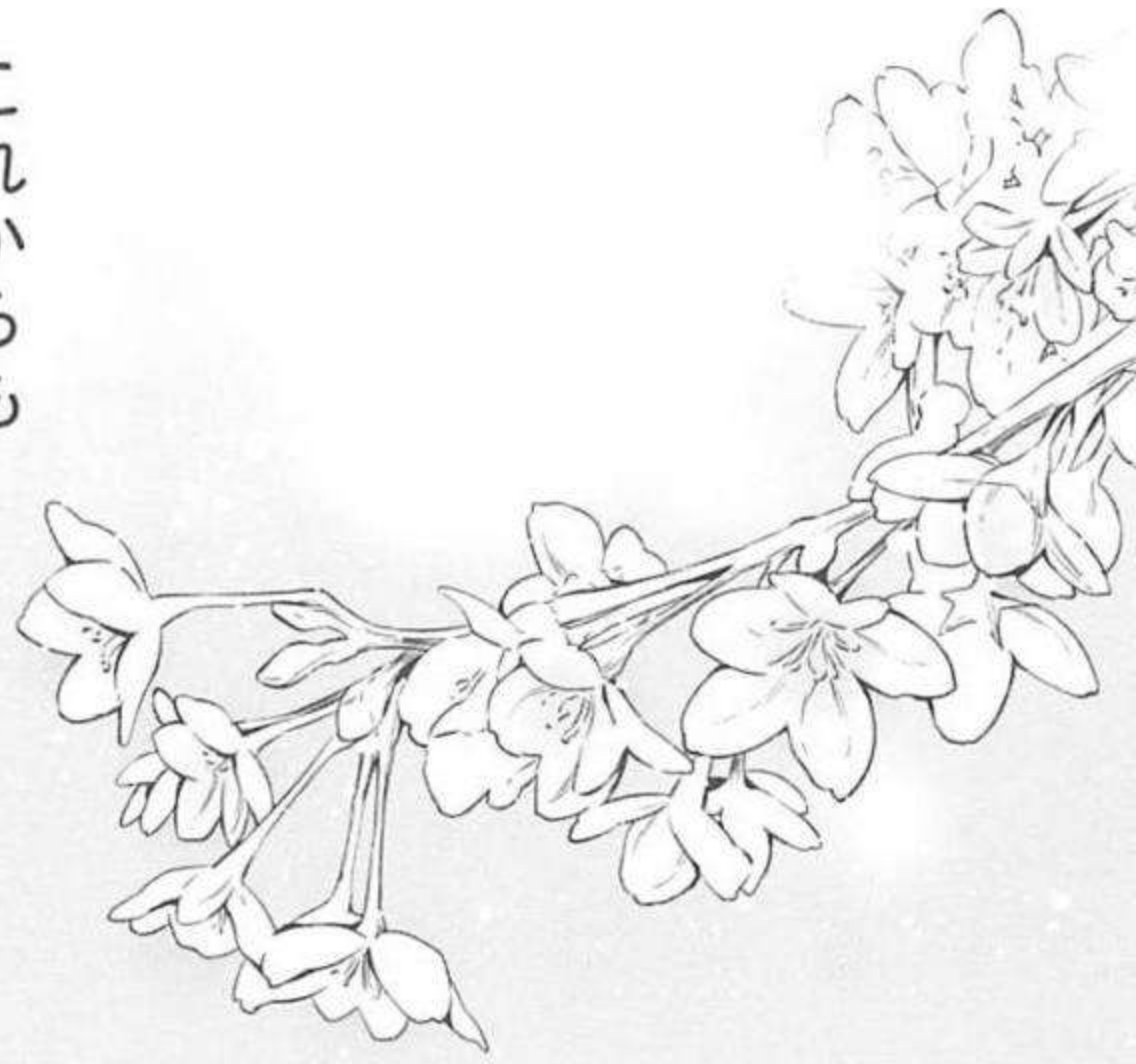


……うん
……だ

ねえ

さよなら

ずっとずっとずっと
これからも



あいらつる

ぼんちる

春も夏も秋も冬も

Always with you.
LoveLive!
Eli & Nozomi

ここまでお読み下さりありがとうございました。嵩乃朔（タカノサク）と申します。

同人誌で60Pにもなる漫画を描いたのは初めてでした。いや、60Pなんて決して厚い方じゃないですが、私にとっては中々の苦難の道でした（笑）つーか、同人でそんなP数描く事になるとは思ってもみませんでした。えりのぞこええ…！

いやもうほんと、妙な熱意のみで描きました。えりのぞが好きすぎてもうあかんです…。毎日ふたりの事ばかり考えてて自分でびっくりです。

なんていうか、希は他人の世話ばかり焼いて、その分自分の世話の焼き方を知らなそうですよね。自分の事になると途端に俯瞰でものを見られなくなるというか。…まあ誰しもそうですけど。というか、絵里とは別のベクトルで不器用そうというか。

絵里は決して弱くはないのに「こうあらねば」という意識が強くて自分をごんじがらめにしてしまって、その縛っている紐の解き方が分からない。一方希は、「こうありたい」というビジョンに対して臆病というか、自分を押し出せない。そういう不器用同士が一緒にいて、妙にバランスが取れている。……いいわあ、えりのぞ（笑）

…なので、多分ふたりは、絵里の方から手を差し伸べてくれないと、進展しないんだと思うんですよね。希からは100%いけない。今回の本は、そんな想いを言い出せない希に対して、絵里さんに頑張ってください本でした。えりちは実はイケメンだと思うんすよ。しれっと真顔でくさい事言ってくれそうというか、「自分が自分が」ってタイプじゃないくせに、妙なところアピール強いっていうかw なので一度決意すると、イケメンなんだと思うんす。心のイケメン。

えっと、そんなえりのぞでした。

お読み下さり、ありがとうございました。

嵩乃朔

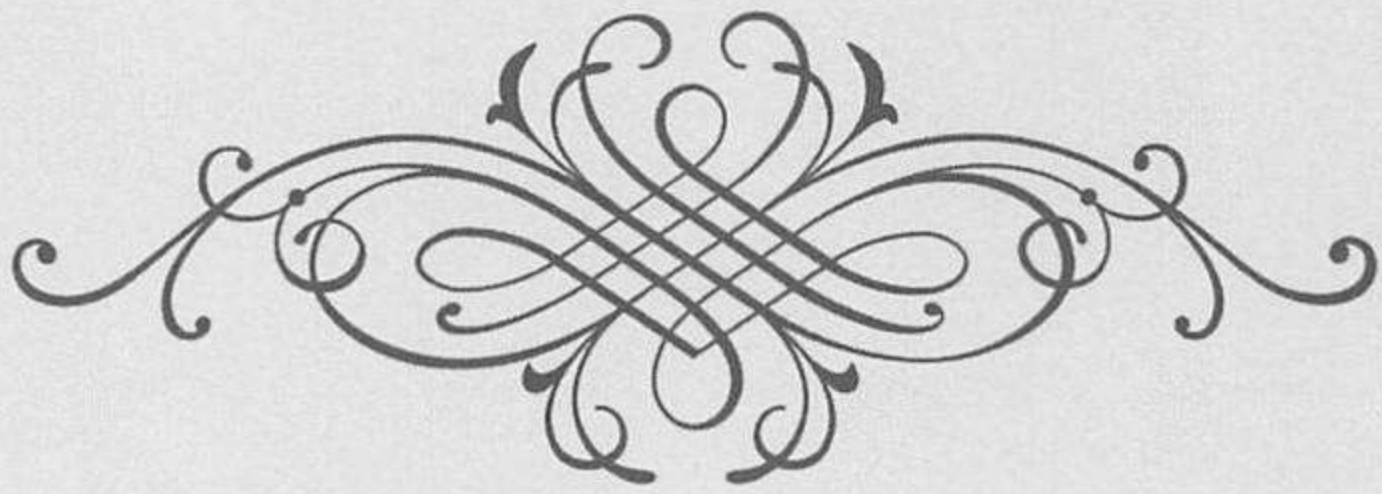
春も夏も 秋も冬も

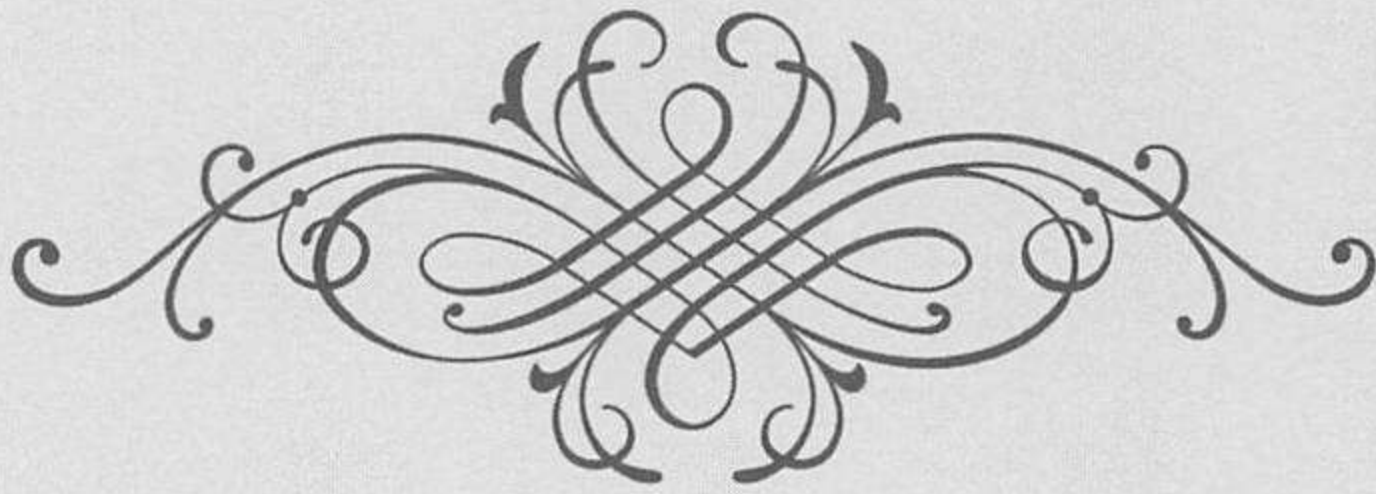
Always with you.
LoveLive!
Eli & Nozomi

R-18

2013年12月31日発行

発行 嵩乃朔 / Waterfall
s.takano.wf@gmail.com
<http://unmoral.sakura.ne.jp/waterfall.html>
<http://www.pixiv.net/member.php?id=2675148>








Welcome home
Eli & Nozomi

Waterfall

#8 「私の望み」記念本



Welcome home

Eli & Nozomi

Waterfall

8 「私の望み」 記念本

いつしか小さな勇気さえ
出せなくなっていたの

勇気の出し方さえ
忘れてしまったの

目の前の星をただながめるだけで
腕を伸ばす事もしなかった

はい
はい
はい

みんな気をつけて
帰るんよ——

はい——

——
だって

希望を口に出してしまったら

叶わなかったらつらくなるだけだから

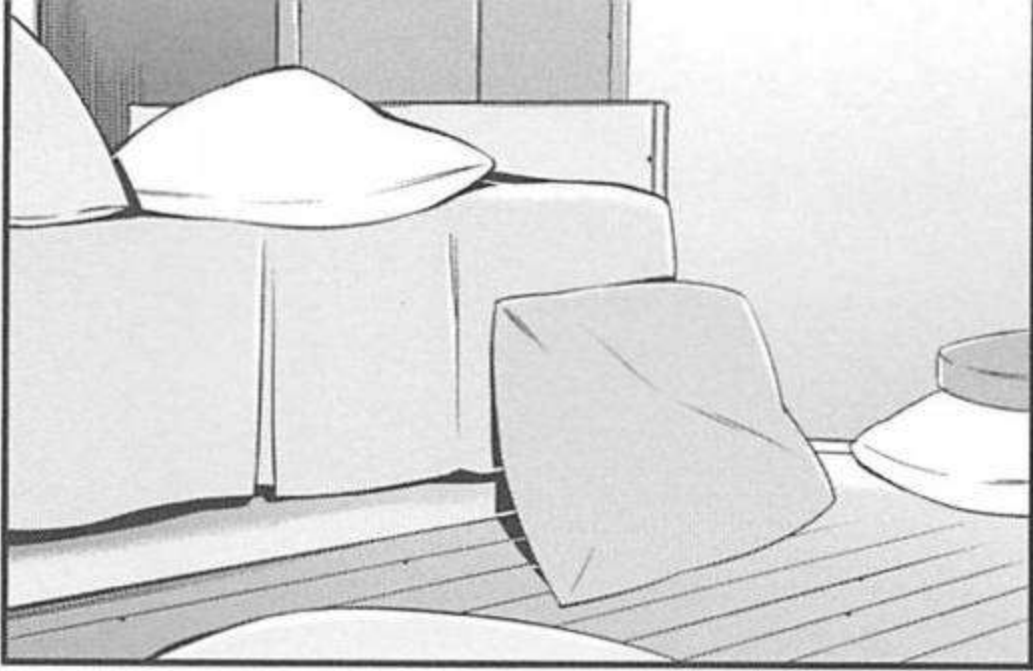
だから

たくさん希望を
飲み込んだままにして

うちは

……ただいま

なんてな



温かかった気配は
ぬげがらになって

「ただいま」や
「おかえり」を言う
相手もいなくて

いつしか
そんな事にも慣れて



慣れた振りをして



……うち

よくぼりやなあ
今日はあるなに
幸せやったのに

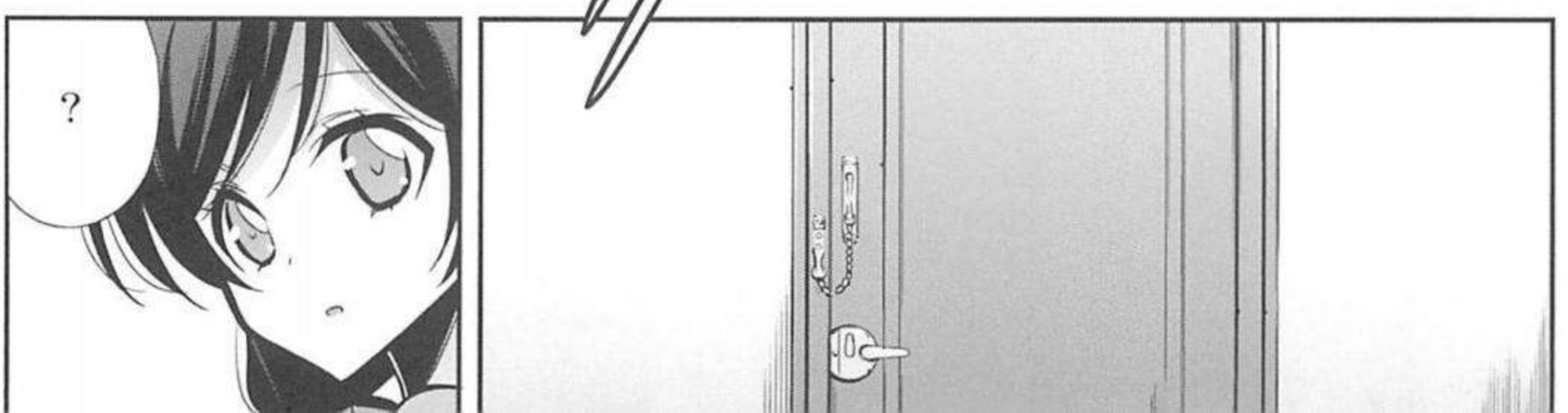
また寂しいやなんて

……望みすぎたら
バチが当たってまうやん





だから
どんなに嬉しくても
その反動で
孤独が募っても
さみしいなんて
思ったらだめ





.....絵里ち



.....絵里ち
どないしたん？

.....忘れ物？

.....ちよつとね

？



意地っ張りさんに
もうひとつ

クリスマスプレゼントでも
しようかなって

.....？

クリスマス
プレゼントは
もうもらったやん

みんなで
曲を……って

うち
ほんま
嬉しー

ほーら
また遠慮する
んだから
……だめよ

ーちゃんと
言って


さみしいなら
さみしいって

ちゃん
と
言って

ーちゃんと
言えるように

私がそばに
いるから

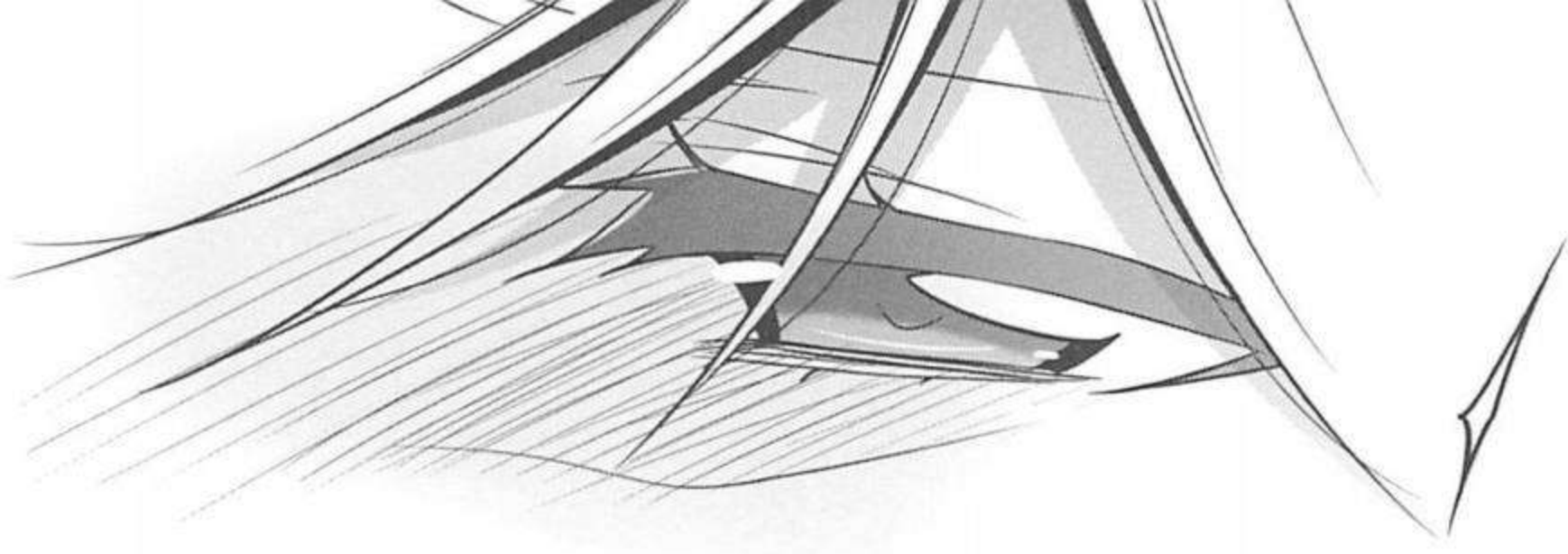
ーだから



卒業したら
一緒に暮らしましょう

あなたが
ただいまって言って
私が
おかえりって言うの

—
ね



だから



私からの
クリスマスプレゼントは
——この言葉





希
おかえりなさい

……絵里ち

……うち……

……私……

いつだって怖がってばかりで

胸の奥の
たったひとつの望みすら
口にする勇気を持たなかったけど



……うん！

ただいま

今夜も、なんの変哲もない
ただいまとおかえりなさいを。

Welcome home
Eli & Nozomi

Waterfall

2014年6月14日発行

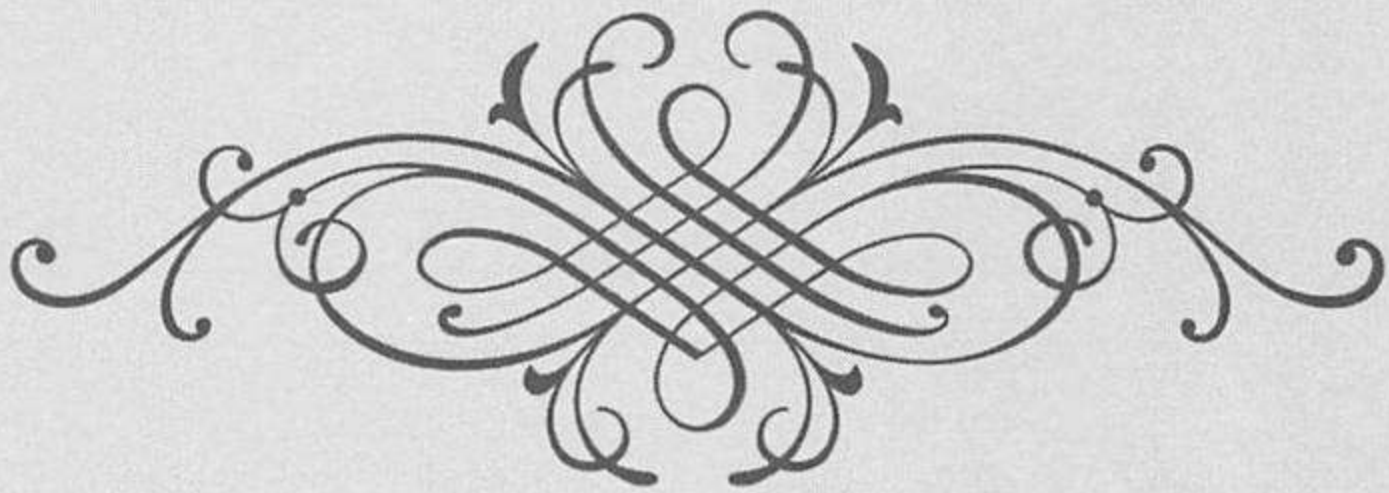
発行

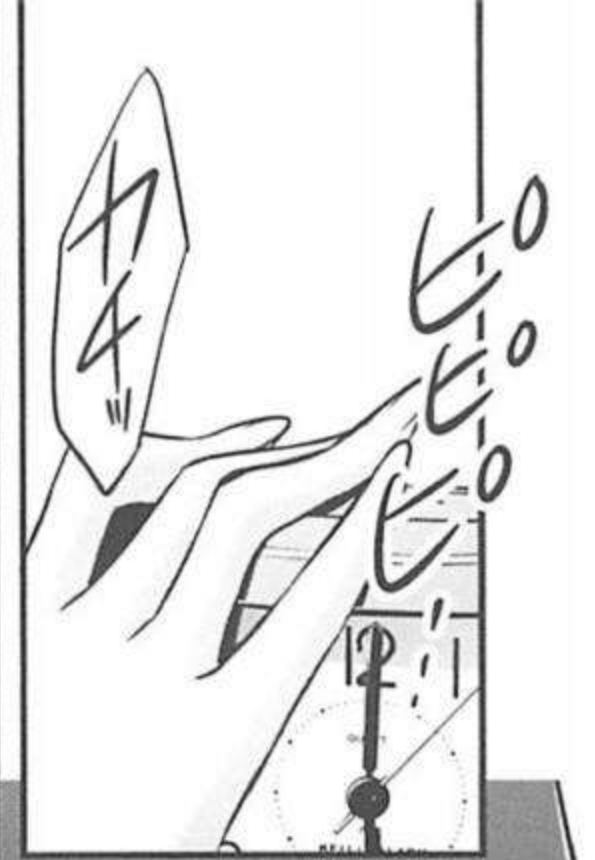
嵩乃朔/ Waterfall

s.takano.wf@gmail.com

<http://unmoral.sakura.ne.jp/waterfall.html>

<http://www.pixiv.net/member.php?id=2675148>





.....



起きな.....



.....ッ



絵里ち……



……

今日も……
巫女のバイト……？

うん そやで
絵里ちも起きる？

……寝てる
今日2回からだし

……だと思った
ほら離して？

イヤ

……



ほんま 絵里ちは
目え覚めるまでは
甘えんぼやねえ

起きこるわよー

はいはい

分かったから
離して？
バイト行かんと

ちゅーしてんれたら
離すー

…ほんま
元生徒会長さんが
こんな甘えんぼ
だったなんて

さすがのうちも
知らんかったわ

希だけ
だもん
早くー

はいはい

ほな
うち行ー

……何？

希



笑ってる

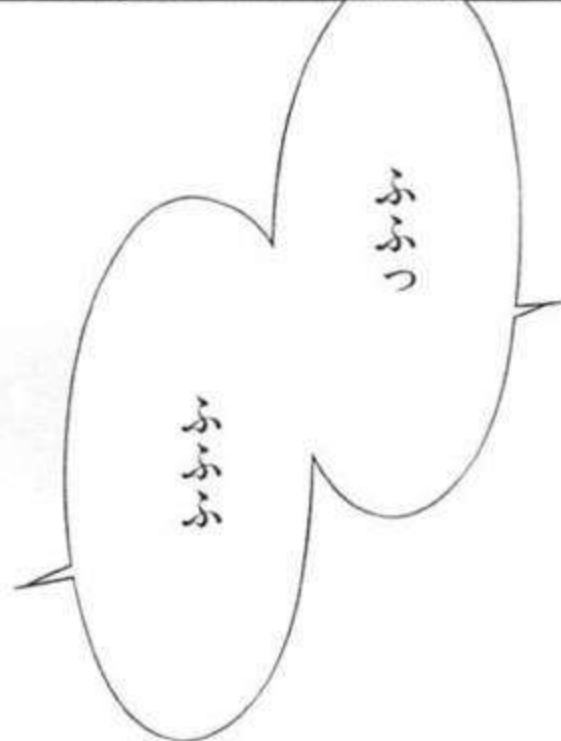


ふふ
...幸せやなあって

ふっ

ゴロニ

私も



ふふ

ふふ



目を覚ますと
隣きにいるのは

あなたで

マンションは

あなたとわたしの

——しあわせなお城

希時間

あっ！

///A
///A
///A
///A



あとがき

ここまでお読み下さりありがとうございます。嵩乃朔と申します。

2014年12月現在、完売してしまった作品をまとめました。入れていない小説作品まで含めるとページ数がおかしい事になるので、一部の小説作品は除きました。：意外とたくさん描きました（笑）

なんでこんなのにぞえり、「ラブライブ！」にハマってんのかなあ、不思議だなあってくらいハマっています。不思議です（笑）でもそれだけ「ラブライブ！」が魅力的なコンテンツなのだなあと思います。

折角なので、各作品についてひと言ずつ。

「優しい、罰」

はじめて描いたのぞえりちゃん。この時は本当の意味でのぞえり、希×絵里でした（笑）でもあまりキャラの解釈は変わってないかも。うちは基本リバナなので、そのうちまた希×絵里も描きたいです。

「夏の終わりの、熱い熱い日に」

小説です。前作の夏コミから2ヵ月しか経ってないのに、攻守が逆転してしまいました(笑) のんたんいじめるの楽しいです(ひどい) ただもう、生徒会室でいやらしい事する二人が書きたかったんです。のんたんがだめよだめよ言いつつ、絢瀬さんの全てを受け入れるところが書きたかったんです(本当にひどい)

「春も夏も秋も冬も」

これ、描く直前まで「未確認恋愛」という教師絵里×生徒希というパラレル設定で長編小説を書いていたんですが、それでやたら希の心境・真理を自分なりに考えまくっていたので、そこまで煮詰めた結果描けた作品でした。アニメ2期8話よりずっと前に描いてたんですけど、まあまあ解釈間違っなくて良かったな、と。いつも一步引いちゃう彼女だからこそ、思いつきり素直に泣く希を描きたかったのです。

「Welcome Home」

これを出したオンリーでは、仕事の都合で新刊は無理と思ってたんですけど、恐ろしいですね、2期8話。気がついたら描いてました。諸事情あって、少数数しか頒布せず、Pixivにて発表していたのですが、やっぱり総集編出すなら、このお話は入れたいな、と思って入れさせて頂きました。

どの作品も気持ち悪いくらいの愛を込めて描きました(笑) 私のお陰でぞえりが好きになったとのお声も頂けたりして、本当に嬉しいです。のぞえり、「ラブライブ！」への愛を込めて。ありがとうございました！



あなたとふたり、花園で

のぞえり総集編

Saq Takano Presents
Lovely! Fan Book Nozomi & Eli

2014年12月30日 初版 発行 / 2015年11月23日 第2版 発行
2016年3月2日 第3版 発行

発行 嵩乃朔 / Waterfall
s.takano.wf@gmail.com
<http://unmoral.sakura.ne.jp/waterfall.html>
<http://www.pixiv.net/member.php?id=2675148>

印刷所 サンライズパブリケーション株式会社

あなたとふたり、花園で

のぞえり総集編

Suz Takano Presents
London! Fan Book Nozomi & Shi

R-18

WATERFALL



Natsuno Owarino
Atsui Atsui Hini

Haruno Natsumo
Akino Fuyuno

Yasashii
Batsu

Welcome
Home

あなたとふたり、花園で

WATERFALL

ウォーターフォール